

第九章 遊びと方言

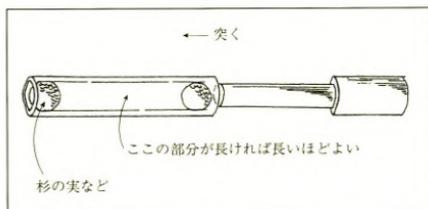
第九章 遊びと方言

第一節 子どもたちの遊び

どのような時代でも、子どもは遊びのプロフェッショナルである。今日では、「外で遊ぶ子ども」は、珍しい存在となってしまう。少子化の進行やパソコンの普及などにより、集団で遊ぶことが物理的にも精神的にも難しくなってきたためであろうか。まさに外で遊ぶ子どもは人間社会における「絶滅危惧種」である。

しかし、チャンスを与えてやれば、子どもは次から次へと遊びをみつけていく。パソコンやインターネットを駆使している子どもですら、トランプや鬼ごっこ、相撲など単純な遊びに没頭することもしばしば見受けられる。オンラインゲームも子どもにとっては楽しい遊びである。しかし、それしかできない、嘆かわしいことだという目で子どもをみてしまっていないだろうか。大人が決めつけてしまっているときがないだろうか。

本章では、物質的には決して豊かではなかった時代の子どもたちの遊びについて、図などを加えて、できるだけわかりやすく解説するように試みた。ここにあげた「遊び」には、今の子どもには難しい（ある意味で）「ハイテク」が必要なものや危険な



【図1】 ツキテッポウ・カラクリテッポウ

ものもあるが、そこは是非、経験者である大人が手伝ってあげて欲しい。

一 屋外での遊び

道具を使った遊び

ツキテッポウ・カラクリテッポウ
も「カミテッポウ」とか「スギノミテッポウ」とか「ツキ」は、「突き」である。球状の弾を筒状の篠竹しのたけなどに押しこめ、それを空気圧によって押し出すという仕組みになっている。弾には「紙」と「杉の実」が多く利用された。弾になにを使うかによって呼称も「カミテッポウ」とか「スギノミテッポウ」などと変化するようである。紙の弾のときには新聞紙などを利用し、口の中でク

チャクチャとよく嘯んで、筒の大きさにあうようにかたく丸める。これを押し出すと、「パンッ！」とも「ボンッ！」ともつかぬ乾いた軽い音がして、紙の弾丸が勢いよく飛び出す。杉の実の場合には、「ピシイッ！」という音がするようで、これは体にあたると痛いのだという。主にこれで遊んだのは男の子たちだった。筒の長さや材質、弾の種類など、子どもたちなりに研究と工夫が重ねられていたようである。

カラクリテッポウには、火薬を使う。戦中戦後、機関砲きかんぱうの弾が野山に捨てられていて、その弾を拾ってきたり火薬をとり出して、カラクリテッポウをつくったのだそうである。火薬の知識は、年長の子が年少の子たちに教えたというが、当然のことながら扱いを誤って暴発することもあり、大怪我をしたという事故もあったという。軍の施設があった矢吹ならではの話である。

ゴムユミ ゴムユミ(三神)・ゴムブチ・ゴムツバジキ・ゴムパチンコ(矢吹)などとよ
(ゴムツバジキ) ばれる。スズメなどを狙って捕まえようとしたらしいが、そううまくはいかな

かったようだ。たいていはそんな遊び方だったようだが、中にはとんでもないいたずらに使った子どももいる。女性がある建物の前を歩いていた。彼女の通った直後の壁を狙って、ゴムユミを打つ弾に使ったのは、なんとカンシヤクダマ。当然、大きな音を立ててカンシヤクダマがはじける。この女性が腰をぬかしたであろうことは想像に難くない。まさに「悪ガキ」のいたずらである。

コ マ 男の子たちが最も熱中し、興奮した遊びである。「ガンコ遊び」とか「ガンコ」ともいう。「ガンコ」とは、「ぶつけること」である。

【遊び方】(矢吹)

① 「ジューミヨオ クラベテ イチ ニノ サン！」といって、一斉にコマを回す。

(この段階で最初にコマが倒れた子どもが一番の負けとなる。これをA太郎とする。次に倒れた子どもをB次郎、以下C三郎と続き、最後まで残った子が勝ちとなる)

② 負けた子(A太郎)は、みんなの前で自分のコマを回す。

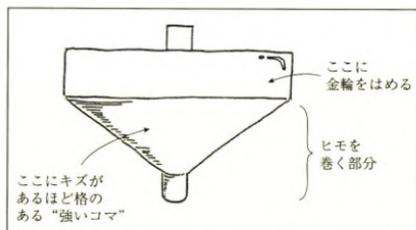
③ ②のコマに、B次郎が上から勢いよく自分のコマをぶつける。このとき、

・ぶつけられたA太郎が残れば(B次郎のコマが倒れれば)、B次郎が一番の負けとなる。

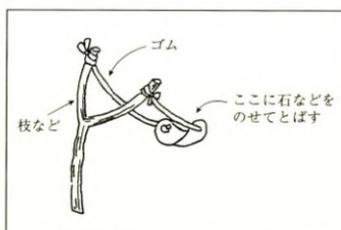
・ぶつけたB次郎が残れば(A太郎のコマが倒れれば)、やはりA太郎が一番の負け。

④ ③で残ったコマに、さらに次のC三郎と順次打ちつけていく。

⑤ 最後の勝者をテンガサマという。テンガサマも同様に自分の番(最後)がきたら、残っているコマに上から勢いよく自分のコマをぶつける。このとき、テンガサマが負けると、勝敗の序列は一番下となる。



【図3】コマ



【図2】ゴムユミ (ゴムッパジキ)

【遊び方】(三神)

基本的には、矢吹と同じだが、③で、A太郎のコマもB次郎のコマも倒れずに回っているときには、A太郎もB次郎もそれぞれ手の掌ひらですくい、それから再びぶつけあう。コマについている金輪かみわで指や手を切った子どももいたという。挑戦した方(この場合はB次郎)が負けたときには、「カカリ負け」といった。

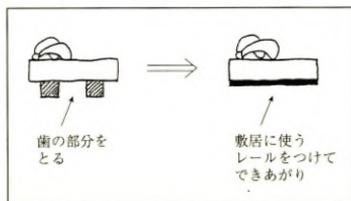
たかが子どもの遊び、ではあるのだが、子どもたちはこの「ガンコ」にかなりの情熱を注いでいたようだ。「遊び終わった後は塩水に一晩つけておく」とか、「シンはとれやすいのでカシの木でつくる」とか、「勝つコマ」にするための研究にも熱心であった。また、勝つためにコマに金輪をはめる、ひもはツバをつけてぎっちり巻く、巻くひもの長さはぶつける距離にあわせて調整するなどの細かな技術や、コマについたキズの数によってコマの格がある、立っているように回っている状態を「スンデル」「スースーだ」、ぶれて回っているのを「ボーボーだ」と表現するなど、コマに対する誇りや回り方に対する美学もあったようである。

ソ リ

子どもたちだけでつくるときには、二本の棒に板を渡しただけの簡単なものである。これに親の手が加わると、箱がのり、中には座布団などをしけるようになる。前に舵かをつけて方向転換できるようにしたものや、ひもをつけて引つ張れるようにしたものなどもあった。

ゲタスケート

高下駄を利用して、スケート靴ならぬスケート下駄をつくり、氷のはった池で滑る。十二月から三月にかけて池は凍っている。ときに氷が割れることもあるが、このときには「カーン」という音がする。この音が聞こえたら逃げるようにした。また岸で滑れば足も届くので危険ではない。大きな事故は多くはなかったようであるが、池にツツパエル(落っこちる)ことはよくあったようである。また、バンカタ(夕方)のうちに道路に水をまいて凍らせておき、そこで滑ることもあった。



【図4】ゲタスケート

缶ゲタ

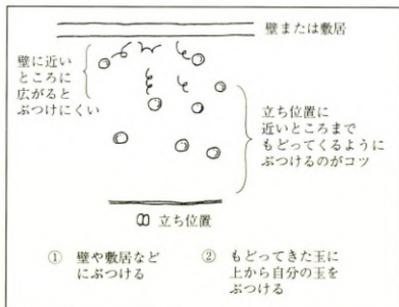
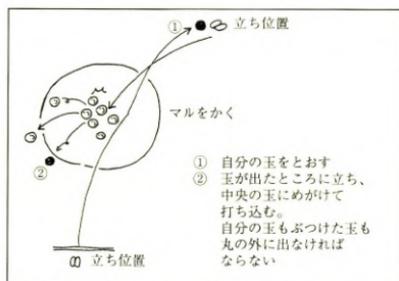
イワシの缶詰の空き缶を使って缶ゲタをつくる。ただし、缶詰そのものが貴重品だったため、そう簡単につくれたものではなかった。

竹とんぼ

いわゆるT字型のもので、飛ばすだけではなく、真ん中にパン糸（タコ糸）をとおしてブンブン回すという遊び方もあった。

ビー玉

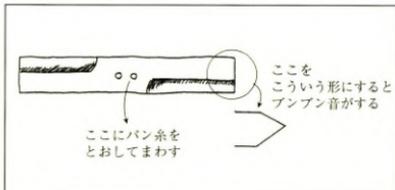
「ババダマ」「タマツコロ」ということが多い。遊び方は多様で、地域や年齢によってもかなり違う。なお、現在のビー玉とは異なり、さまざまな色や模様のはいつたものなどは貴重で、「ガラス玉（ラムネ瓶にはいつているようなもの）」がほとんどだった。さらに、勝った人はビー玉をもらうことができたから、大きくて柄のはいつているビー玉などは、もつたいなくてなかなか使えなかったという。遊ぶときには数個ずつ持ち寄ってはじめる。使うのははいつてい直径一センチメートル程度のもので、キズがあつたり欠けていたりする「とられてしまつてもいいもの」である。ゲームに勝つてるときには、なかなか帰れなかった。「自分ばかり持ち帰つてずるい」といわれるからだ。



【図7】ビー玉



【図5】缶ゲタ



【図6】竹とんぼ

ネンガラ

二人で遊ぶ。五寸クギやクギのような棒を数本用意する（地域によって遊び方はやや異なるようである）。

【遊び方】

① ジャンケンで負けた方からスタートする。クギを地面に向けて打ちつける。

② 次の子がそのクギを倒すようにして、自分のクギを地面に打ちつける。相手のクギが倒れれば、それをもらうことができる。

石けり

円をいくつか描く方法と、マスを描く方法がある。この遊びのためにわざわざ河原までいき、綺麗で平らな石を拾ってきては大切にしておいたのだそうだ。

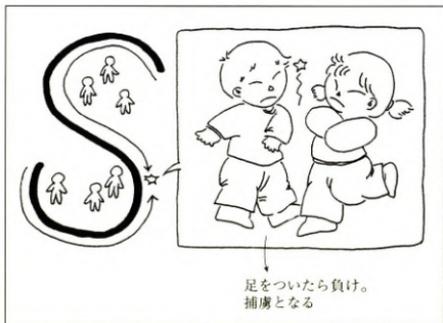
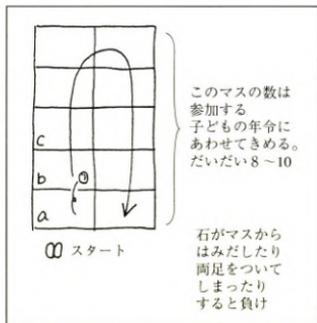
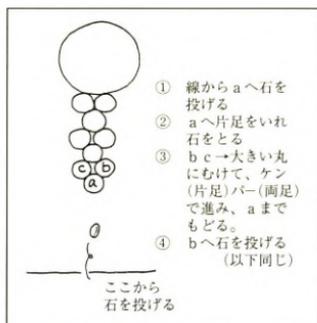
鬼ごっこ各種

缶けり、かごめかごめ、花いちもんめ、ハンカチ落とし（タワラ落とし）、つかめ鬼などがある。

罨など

バツタンカケ

スズメやハトを捕まえるための罨である。養蚕に使用するワラダを使って仕かける。これで仕留めた鳥は、イロロリ（罨炉裏）で焼き、砂糖醤油で食べたという。なお、「バツタン」とは草を結んでとおった人が転ぶように仕か



【図9】鬼ごっこ（エス）

【図8】石けり

けた毘や落とし穴のことである。

ドジョブヂ
(ドジョウブヂ)

夜、苗代へいき、カンテラなどで照らしながら、ドジョウを捕まえた。または水口にドウ(民具)を仕かけておいたり、網を仕かけて下流から川底をかき回して追いこんだりするなどの方法もあった。

植物の遊び

首飾り

レンゲとシロツメクサで編んでつくる。あるいは、柿の花にワラや糸をとおしてつくる。

笛

ニンニクの葉やピー草(スズメノテッポウ)でつくる。また、ホオズキの

実の皮を口に含んでギユウギユウと鳴らす。

イツコクムシ釣り

ニラの葉でイツコクムシ(蟻地獄)をつる。

笹舟

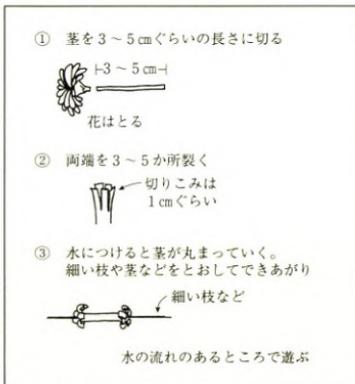
笹ではなくヨシ(葦)でつくる。

風車

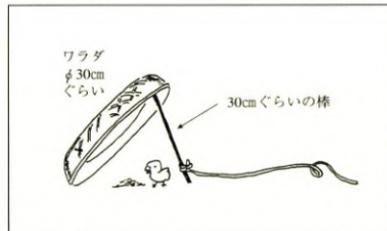
ヒイラギの葉でつくる。

水車

タンポポの茎でつくる。



【図11】 たんぽぽの水車



【図10】 バッタンカケ

その他

ハンコグサ（ポツポガラ）の茎からはオレンジ色の汁が出る。それを友達の手の中を押して、「仲間の印」にする。

その他

男の子たちは、元気一杯だったがゆえに羽目を外すことも多かった。平屋建ての校舎の屋根にのぼって走り回ったり、墓地にいつて墓石を倒したりなど、かなり荒っぽいこともしばしばやっていたようである。もちろん、その後には教師や親など、大人たちにみっちりとお灸も灸をすえられたことはいうまでもない。

二 屋内での遊び

「キシヤゴ」とよぶことが多い。だれもが持っているようなものではなく、持っている人のものを使って遊んだ。おはじき

現在のもののような色とりどりの綺麗なものではなく、ガラスでできたものだった。特に戦中戦後はものがないか

つたため、茶碗の割れたものをとっておき、それを石で磨き、キシヤゴがわりにして遊んだという。遊び方は二、三種類ある。

(一) キシヤゴを手でつかみ、それを上にあげて手の甲にのせる。どれだけのせられるか、その数を競う。

(二) 「将棋崩ししょうぎ」のように山にして、音を立てないように崩していく。

(三) ①キシヤゴを軽く一握りして、床や机の面に沿って手の内側で回して広げる。

②隣りあっているような二つのキシヤゴを選び、その間に指をとおす。

③二つのキシヤゴを指ではじいてぶつける。

④はじかれた方のキシヤゴを一つとる。または、再び指を間にとおして、とおればそれをとる。指がとおらなければ失格。

⑤ばらまかれたキシヤゴを集め直して①へもどる。その繰り返しで数を競う。

この遊びには「ウソッコ」と「ホンコ」がある。「ウソッコ」というのは、数を競うだけで持ち帰ったりしない勝負で、「ホンコ」は、勝って得た分のキシヤゴを持ち帰ることができる。

(四) 国とり

①地面に四角形を描く。任意の一点を決め、そこから親指を中心にして円を描く。

②円の中から指で、三回はじいてもどってくる。成功すればキシヤゴの軌跡が自分の国となる。

③相手の国にはいつたり、四角形の枠の外に出たりしてはいけない。

ビー玉

外で玉をぶつけて遊ぶ方法のほかに、ビー玉に点数をつけてそれをあてる遊びがある。

例えば、無色の玉は「一点」、色や模様がいって小さいものには「二点」、色や模様がいって大きいものは「三点」などというように点数を決める。これをお互いに適当に数個握り、足して何点になるかをあてる。これは冬、コタツにはいりながらやることが多い。

メンコ(パッタ)

「カクダシ」という遊びが多い。絵柄は、戦国武将のものが多かった。紙の質は決してよくはなく、特に戦後は悪かった。丸や四角など、大きさや形はさまざまで、大きいものでは現在のA5判(縦二

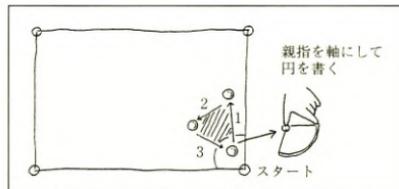
〇メートル、横一四八メートル)ほどもあるものもあった。「パンカ」という三メートルぐらいの厚さの紙でできたものはなかなかひっくり返らない。角を少し折っておくとよく飛んだ。一銭で五枚ぐらい買うことができた。

【遊び方】

①座布団を使ったり、四角形を描いたりして、遊びの範囲を決める。

②中央に一人五枚ずつ出して重ねる。負けるととられてしまうので、できるだけ汚れているようなものを出す。

③手持ちの札を②にぶつけながら崩していく。そうして、枠の外に出すことができる。それを得ることができる。



【図12】 国とり

あるいは、②のときに特定の一枚を決めておき、それを外に出すことができれば、残っているものを得ることができ、などというルールもある。

コックリサン

どちらかというとなの子の遊び。紙に五十音順にカナを書く。縦書きで間を少しあけておく。そして、図のようにしばった箸を用い、窓を開けてはじめる。四時ごろ夕日が差しこむ学校の教室などでよくおこなわれた。箸を持つのは二人。この二人は目をつぶる。怖くなって泣き出す子どももいたという。盗難があったときの犯人さがし、あるいは好きな子を占うなどの目的でおこなわれた。

カードゲーム・「庄屋・キツネ・鉄砲」の三種類を出しあってジャンケンのようにして勝負す

ボードゲーム　る遊びや、軍人カードを使って、やや複雑な点数配分のルールによる勝負をおこなう遊びもあった。カードの種類は「タンク」「ロボット」などという兵器や「大将」「スパイ」などの人物を描いたものが四〇種類ぐらいあり、戦争中にはとても流行した。

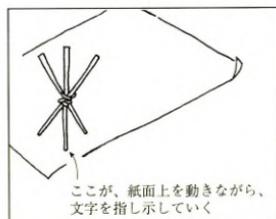
お手玉

「オヒトツ」ともいう。歌にあわせて、お手玉を一個から数個、投げたり受け止めたりする、かなり複雑な動きが求められる遊びである。お手玉は手づくりで、中には^お殻や^蕎麦殻などをいれた。特にジシヤガラやアズキは音がいいといわれた。

おてだまのうた

(おひとつ…おひとつ…)

おみんなおみんな　おむくりかえして　おくてんばらしよ
くわねぞ　くわねぞ　くつてもはなさき



【図13】コックリサン

はなさき はなさき はなもおでしき

おでしき おでしき おでもおっこい

おっこい おっこい おっこいもんもん

もんもんとしばっさもんもんとしばっさばっさもかき

かきおとしバタバタ かきおとしバタバタ バタも一俵二俵

一俵二俵 もんだわら 一俵二俵五俵もんだわら

だわらもちぢれけし

ちぢらけし ちぢらけし ちぢらもひとわさ

ひとわさ ひとわさ ひとわもふたわさ

ふたわさ ふたわさ ふたわさおみんな

おみんな おみんな おむくりかえして おくてんばらしよ

うしろのちゃぼとり たまごなした れんこん こがらし いっぱかしもしました

それからおひとつ なーに おひとつ たまなし おひとつ

かえきってぶつぞい たまきってぶつぞい

(話者 田谷トリ 聞き取り 長尾幸子)

三 学校での子どもたち

明治五年（一八七二）の学制発布以来、子どもたちは「学校」という特別な空間で一日をすごすことになった。もちろんはじめのうちは義務とはいっても有償ゆうしょうであったから、就学率も低く、欠席率や退学率も高かった。就学させてもらったとしても幼い弟妹などを背負いながら授業を受けたり、農繁期には欠席したりと満足に授業を受けられない状態が続いた。校舎や設備、教材なども十分ではなく、教員の給与もかなり低く退職者も多かったようである。それでも子どもたちは熱心に学び、そして元よく遊び、子どものための新しい世界である「学校」を満喫まんきつした。

大人たちにある程度の束縛そくばくを受けながらも、子どもたちが築いてきた「学校」という世界について明らかにしてみたい。

（一）学校での遊び

ウマノリ

廊下や教室でおこなわれた遊びである。二つのグループの対抗戦である。人数は何人でもいいが、一グループ五人程度が適当。図14のように、一人が柱などを背にして立ち、その股下に二人目が頭をいれて前屈の姿勢をとる。さらに三人目以降も同様にして前の人の股下に頭をいれた前屈姿勢をとって長いウマをつくる。

次にもう一方のグループが、後ろから助走をつけて一人ずつ飛びのっていく。途中でウマが崩れてしまったら、ウマの方のグループの負け、逆にウマにのり切らなかつたら飛びのつた方のグループの負けとなる。一番飛べる人を先に飛ばせるのがコツ。男女とも交じりあって休み時間にはよくおこなわれた。

その他

男の子たちの間では、野球（ベースボールともいっていた）もさかんにおこなわれていた。明治の後期ころにはすでに子どもたちの間で流行していたようである。

なお、前述の屋内外の遊びも、校庭や校舎内でおこなわれた。



【図14】ウマノリ

(二) 学校行事

春

桜の花が満開になるころ、運動会が開かれた。子どもたちの母親は、前の晩からご馳走をつくった。当日は、重箱に詰められたご馳走と、お酒、丸めたゴザを持って校庭へ向かう。早々に場所とりをする家族もあった。町の人たちも花見をかねて、観戦に訪れた。学校の行事であるとともに、町の人たちも楽しみにしていた行事の一つだったという。明治の後期ごろ、競技をする子どもたちの服装はもちろん着物であった。男子は裾をたくり、女子はたもと着物に襷がけ、下は袴などだった。やがて紅白の帽子や鉢巻などもこれに加わるようになった。女子は、オルガンにあわせてダンスを披露することもあった。

ただし、このように華やかで楽しいものであったため、明治天皇崩御などのときには中止となることもあった。

遠足は、今日のようにバスなどはない時代である。目的地までただひたすら歩いた。大池、鳥峠、牡丹園などまでいったこともあるというから、往復を考えれば大変な距離である。

夏

学校にプールがなかった時代、子どもたちは川で泳いだ。先生たちも一緒になって川で泳ぎを教えたという。

秋

秋は、野山の恵みを採集した。茸狩り、イナゴとり、落穂拾いなど。子どもたちの方がずっと上手で、若い先生などは子どもにバカにされることもあった。

冬

矢吹もかつては、今よりも降雪量が多く、また寒さも厳しかった。毎年、三〇センチ程度の積雪があったようである。こうした中でも子どもたちは、頭巾や襟巻で顔を覆い、ウス靴といった藁の靴をはいて寒さをしのぎながら学校へ通った。ゴムの長靴が普及したのは、昭和にはいってからのことである。

昭和のはじめごろまで、教室の窓は全部障子だった。教室には、九〇センチ四方の大きな火鉢が一つおいてあるだけで、炭が真っ赤に燃えていても、後ろの席はすきまから吹きこむ粉雪と寒さに手がかじかんだという。子どもたちは、その手に息を吹きかけて鉛筆を走らせた。休み時間になると、あつという間に火鉢の周りには人だかりができる。一応交代で暖をとることはなっ

ていたらしいが、やはりこの世界にも「ボス」はいて、なかなか譲ってくれなかったという。そんなときには、重なりあう人のすきまから手だけ前に出して暖めた。前列で火にあたっていている人は、足をあぶっているうちに足袋を焦がすなどということもあった。こうしたわずかの暖をとるための火鉢の燃料も、子どもたちが自ら集めてこなければならなかった。初冬には、薪まきと称して、山で松葉や枯れ木などを拾い集めた。燃やしているうちに教室が煙でいっぱいになることもあり、火を消したりつけたりと、勉強にならないときもあったようだ。

茶箱を利用して、お弁当を温める箱をつくった学校もあった。ところが、弁当を箱の下の方にいれると温まりすぎて、中のおかずのタクアンが煮えてしまうなどということもあった。温まって教室中に広がるタクアンの匂いは、子どもたちの忘れ得ない「学校の匂い」の一つであった。

雪の積もった校庭では、雪合戦がしばしばおこなわれた。

ねずみとり 昭和二十年代はじめ、戦後まもないころに矢吹小学校でおこなわれたようである。ねずみのシツポ一本につき黒コンクール 砂糖の飴玉なん個とか、抽選による衣料品の配給などがあったという。ねずみの「シツポ」を持っていくところから考えると、公衆衛生のためにおこなったものであろうか。なんのためにおこなわれたのかは不明である。

(三) 学校へいく子どもたち

明治から昭和にかけての子どもたちの基本的な服装は、着物である。毎日違うものなどを着られるわけもなく、いわゆる「着たきりスズメ」がほとんどだった。着物の袖で垂れてくるハナミズをふく。何度も同じ所でふくものだから、そこは次第に不思議な光沢を出すようになった。少ない教科書と鉛筆を小さな風呂敷に包んで肩から背負い、カタカタと中身を揺らしながら通学した。昭和のはじめごろになっても、肩かけかばんを持っているのは、裕福な家の子どもだけだった。足元はもちろん藁わらでできた草履である。戦時中の物のない時代、あまりの貧しさに竹の皮で編んだ草履をはいてきた子どももいたそうである。さまざま

な文房具のあふれる今日とは異なり、すべて儉約しなければならなかった。また男の子の被る帽子も、できるだけ大きいものを買って卒業まで間にあうようにしたり、足の爪をなるべく短く切って足袋が破けないようにしたりと物を大切に使った。また、皆勤賞かひけんしょうなどの副賞としてもらえる文房具は、新しいものを手にいれる最大のチャンスだったので、熱心に通学し勉強した。

お弁当は、日の丸弁当かおにぎりだった。特に「しょうゆ飯」といって醤油をかけたおにぎり子どもたちの好物だったという。特に戦時中は、日の丸弁当は、梅干しを真ん中にいれていくことがよいようにいわれていたから、梅干しの嫌いな子どもはこっそりと気付かれないように、弁当箱の隅に寄せて残してきたそうである。

(四) 子どもたちと先生

教師の服装は、男性は背広、女性は着物に袴というのが一般的であった。袂の端を帯に挟んで黒板に文字を書く女性教師の姿は、女の子たちの憧れの一つでもあったようだ。やがて女性にも洋装が普及し、ヒダスカートが一般的になってきた。昭和のはじめごろ矢吹小学校に赴任した若い先生は、女学校の家庭科でつくったタイトスカートをはいて登校した。ところが、これが女生徒たちの反感を買い、「コシマキ」というあだ名をつけられ泣かされた。慌ててヒダスカートを買い求めたというエピソードも残っている。

そんな生徒に泣かされた先生もいたが、やはり子どもたちにとって先生は怖い存在だった。特に教師の制裁は、日暮れまで廊下に立たせるのが常套手段じょうそうしゅんで、これに両手に水のはいたバケツを持たせたり、机の蓋を持たせたりと先生によつてはさまざま「おまけ」がつく。ときには教師の飼っている小鳥のえさとりを命じられたこともあったという。叱られた当時は泣きじゃくつても、歳を経てからは懐かしく思い出す学校の先生の姿がそこにある。

第二節 「ことば」の文化

一 ふるさとの昔話

以下「神田の鼻取り地蔵」から「大根嫁」までの話は、町史編纂室が独自に発行した『やぶきの昔話』に加筆して再録するものである。

神田の鼻取り地蔵

神田の慈眼寺境内には地尊御堂があり、その中に二体のお地蔵様が大切に祀られてある。左側の大きいのが鼻取り地蔵尊で、右側の小さいのが子守地蔵尊と伝えられている。もとは、谷中に近い三城目の萱山にあったといわれているが、地蔵田にあったともいう。

そのお地蔵様がなぜ神田にやってきたかについては、次のような話が伝わっている。

あるとき、三城目の人達がこの地蔵尊を持去ろうとしたが、地蔵尊はびくとも動かなかった。ところがその後神田の人達がきて手をかけたところ、やすやすと動いたというのである。

(初出『続あゆりの里』相楽真一 昭五十二・四 話者 鈴木ヒデア)



解説

「鼻取り」とは、水田のシロカキの際に、馬の鼻（実際はあごの下）に五、六尺（一五〇〜一八〇センチくらい）の竹の棒を結びつけて、馬を誘導する作業のことである。馬の後ろには、馬鞆とよばれる農具（第二章第一節参照のこと）をつける。馬鞆の刃先が、土を耕す角度になるように人が支える。馬が馬鞆をひく力と人が馬鞆を支える力で、土が起こされるという仕組みである。

「鼻取り」は、馬が蛇行したり、斜めに進んだりするのを防ぐための単純作業だから、かつては一〇歳ぐらいの子どものための仕事だった。腕力がなくてもできる仕事とはいえ、手足もまだ短い子どもたちにとつて、自分の体に比べれば山のような巨体の馬をひいて歩くのは容易なことではなかった。利口な馬になると、子どもをバカにしていることを聞かず、勝手気ままに歩くこともあったという。そうなれば、当然のことながら、後ろから馬鞆を持つ大人たちに子どもはひどく叱られた。したがって、この歳の男の子たちにとつては、田植え休みがくるのは苦痛で、この作業が済むまでは、随分泣いたものだという。そうした子どもたちの姿をみたお地藏様が、ときにはその子の身代わりになったり、あるいは子どもに居ない農家のために子どもに姿をかえて鼻取りを手伝ってくれたりしたと伝えられ、この名がつけられた。

枯尾花

あゆり橋の左岸から堂の陰に至る道路は明治のはじめごろまでは、大変曲がりくねった道であった。そのころは人家もなく、道もせまく、墓地には老杉が天を突いていたろうから、昼でも嫌な道であつたらう。

ある夜、気の弱い男が、ここを通り抜けようとしたら、スーッと冷たい手で頬を撫でられたという。てっきり幽霊が出たと思ひ、命からがら家へ帰って、この話をしたらたちまちのうちに村中の噂話になってしまった。そこで、その話を聞いた度胸のいい男がほんとうに幽霊かどうか、たしかめてやろうと真夜中に通ってみた。まさしくスーッと頬を撫でられたので、それをぐっと握ったところ、それはなんと夜露にぬれて重くなったススキの穂（枯尾花）であつたという。

（初出「続あゆりの里」相楽真一 昭五十二・四）

伊達政宗とぞうりとり

むかし、伊達政宗という仙台の殿様がいた。その伊達政宗には、まかべ四郎というぞうりとり（草履とり）がいた。

あるとき、伊達政宗が雪の中を歩いていった。まかべ四郎は、

伊達政宗の足がいくらかひどいだろうと思ひ、下駄をふところへだいてあたためて差し出した。ところが、温かい下駄をはかせたものだから、伊達政宗は足がアツイ！と感じて、「おれに、やけっぱださせるつもりか、おれの足を焼き払うっちゃなにことだー」といって、その下駄をもって「パキン」とまかべ四郎の額をぶった。まかべ四郎の額には、下駄の「二」の字がついた。そして、「いやいや残念。孝行と思つてやったのが、あだになった。こういうところにおれはいるべきではない」そう思つて、上方にのぼろうと決心した。そうして旅して、二本松まで来た。そこで、二本松の殿様の家中にもぐろうと思つて城の門までいったけれども、「温めた下駄の話をよく解釈してもらえればいいが、この者は仙台から探りに来た者ではないかと思われは、おれの首は、ここで取られてしまふ。いや、いっそ上方の京都に行つて僧侶にならう」と決心し、京都の寺に入った。

何十人という小僧がいるわけだが、自分は年をとっているから人一倍真剣に



ならなければ一人前の僧侶になれねえと思ひ、真剣に修行をやつてのけた。ある夜、便所の中で「グジムジ、グジムジ」とお経を読んでいる人がいた。よく見たところ、それはまかべ四郎だった。だから、みんなよりお経も早く読めるようになった。

やがて、僧侶にお坊をつけてやろうといわれ、まかべ四郎はお坊をつけてもらい、さらに瑞巖寺ももらった。それで仙台に行かなければならなくなった。行きたくはなかったが、しょうがないというので仙台に下った。

伊達政宗の侍をならばせ、まかべ四郎は三角のいすに腰を降ろして、お経をとなえた。そして、伊達政宗に「実はおれは、ぞうりどりのまかべ四郎だ」と名乗ったところ、伊達政宗は地べたに手をつけて頭を下げた。

(初出「ふるさとむかしむかし」田内青年会 昭五十六)

話者 本田初之助)

住職の幽霊

あるとき、城見寺の住職に急用ができて、何日か寺を留守することになった。そこで、檀家の若者三人に寺の留守番を



たのんで出かけた。

留守番をたのまれて何日目かの

夜、三人で住職が

置いていった酒を呑み交わしていたがそのうちに部屋が急に暗くなったので、油でも無くなったのかと、行燈かどしの方をみた。すると、なんとその行燈の後ろに、数日前に出かけた筈の住職がのつきりと立っているのである。いつ帰ってきたのか戸を開けた音もしなかったのにと、よくよく顔をみたら、その顔や頭から真赤な血が流れていたという。驚いた三人は、声も出ず、これは大変だと寺を飛び出し一目散に逃げ帰った。途中ドンドン橋のあたりで、三人は川に落ち、ずぶ濡れになってわが家に帰ってきた。その姿を家人にみられて「度胸なしめ」と笑われた。

ところが、その翌日、住職の泊まったお寺から飛脚がきて、昨夜寺に強盗が入り、こちらの住職がその強盗に立ち向かったのだが、そのために斬り殺されてしまったと知らせた。その斬り殺された時間が、ちょうど行燈の後に住職が立った時

間とびつたりであったという。

(初出「続あゆりの里」相楽真一 昭五十二・四 話者 関根富久治)

人喰いグモの話

むかし むかし 大きなやしきに、若ものが「こんばんは、こんばんは」とたずねたそうだ。奥の方に灯がみえたので、そっちへ行ってみたところ、娘のすすり泣きがきこえてきた。親がいうことには、「娘が、明日、人身御供にお宮にあげられてしまう」と。「それで、人身御供にあげるとどうなるのか」と若者がたずねると、「宮の大きにも喰われてしまうのだ」と。その話をきいた若者が身代わりになってやろうと申し出た。夜になると、娘の代わりに長持ちに入り、お宮に運ばせた。飲んだり、食べたりして待っていると、大ぐもがやってきた。娘を喰べようとうたをあけたところ、若者が刀を出して、大ぐもに切りつけた。くもはびっくりして逃げたが若者はどこまでも追っかけて、とうとう退治した。

それから若者と親子がしあわせにくらしたという話だ。

(初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四 話者 本田初之助)

蛙の恩返し

むかし むかし トツチャ（お父さん）と娘つこがくらしていたと。娘もそろそろ大きくなったで、「嫁に、くんにくっちゃなんめい（お嫁にいかせなくてはなるまい）」と思つて娘に相談したところ、娘も納得して買物にでかけた。

大川の橋を渡ろうと思つたところ、川べりから大きな声が聞こえた。見たらば、大蛇が蛙をつかまえてのみこもうとしていたので、二人は追払つてその蛙を助けてやつた。それから、買物しての帰り、途中の山道で、出会つたばさまがいうのには、（自分は）さつき助けられた蛙で、お礼に持つててくれと、「ふだん着のカツパ」とそのほかに「フクベ」一ヶに「針千本」入れて、これは嫁道具の一つだと教えてばさまは歸つていった。

ある日若いもんがきて、こちらの娘をせびわたしの嫁にくれときた。トツチャは、「まだ早いがくれべえ」ということになった。若いもんは、この裏山の天池のはしの家なので、結婚式の日に、この間のばさまがゴシナンで出迎えにきた。

嫁さまになった娘のいうことには、一つたのみがある。池の中にフクベを投げるので、これを沈めてほしい、と。さつ

そく婿さまめ、紋付、袴をぬいて池の中にとびこんで、一生懸命沈めてみると、フクベの中から千本針がでてきて体をさした。婿は、たちまち大蛇の身に変つて千本針でたおれてしまつたど。

ゴシナンのばさまは、「いい婿さんをみつけてしあわせに」と娘にいうと、蛙になつて消えてしまつたという話だ。

（初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四 話者 本田初之助）

商人の自慢話

むかし むかし たくさんの行商人が集まつて、なんかおもしろい話をしようということになり、一番おもしろい話をした方にはごほうびをあげることにしよう、と、宿屋の主人がいった。みんなが相談してはじまつた。

一番目の静岡の人は「俺の方には、何人まいても、まかれないう大木があつた」という話。

二番目は「俺の方の新潟には、大きな竹が雲の上まで伸びてしまつて、何度もくり返し伸びた大竹があつた」という話。

三番目は「俺の近江のびわ湖をひとまたぎした牛がいた」という話。

四番目は「富士山をひとまたぎにした和尚がいた」という話。

五番目には宮城の人「めずらしい人がいて、静岡の太木を買って太鼓の胴にくりぬいて、新潟の大竹を買ってたがをはめて、近江のびわ湖をひとまたぎした牛の皮を張って太鼓をつくって、富士山をまたいだ和尚がたいたたら、三年三月ごおーん ごんごん ごんがなっていた」という話。

これを聞いた宿屋の主人やみんなが、笑いだした。ほうびは宮城の人にすっかりとられてしまったという話。

〔初出〕田内の民話・伝説〕田内青年会 昭五十四 話者 本田初之助

荒池とおるす新田

ざっと昔、三城目白山の荒池は、大雨や嵐で毎年堤防がくずれて、池下の水田を泥水で荒らしました。それで、おるすという娘を人柱にして、堤防を築いて頑丈なものにしました。それ以来、嵐でも大雨でもくずれることはなくなりましたが、おるすのつくっていた堤の下の田をつくる百姓の家には、不幸が不思議におこりました。それで、おるすヶ新田といって恐れしました。

〔調査者 星 圭之助〕

ごんぼ猫

昔々、そのまたずうつと昔、三城目のごんぼ町に尻っぼのない「ごんぼ猫」という猫が居たそう。このごんぼ猫は踊りが大好きで、暇があるとよく踊っていました。実はこのごんぼ猫、化け猫だったんです。化け猫は踊りが得意というじやありませんか。そうそれなんです。

とくに、東の空からまん丸い大きなお月様が昇ると、ごんぼ猫はじつとしてはいられません。何となく落ち着かなくて胸のあたりがキューとなったり、お尻がむずむずして、ない尻っぼがピクピク動くんです。夕飯もそこそこに手拭いでほほ被りをしていそいそと出かけます。月明かりの林をぬけ、生繁る草むらを足音もなく進み、野中の草ぶきのお寺の前に出ました。このお寺は住職さんが居ない荒れ寺で、村を見下す所にありました。ごんぼ猫は、誰も居ない寺の中に入ると早速、踊りの準備にとりかかります。寺の中央のお棺堂（棺箱を置いたためのお堂）のあたりで踊るのが、とくに大好きでした。後足でひよいと立って、前足をまるめ、ひよいひよいと上手に踊ります。しばらくすると、一人、いや一匹ではどうもつまらないので仲間を呼び集めました。



ニアオー、ゴロ、ニアオーと下の村の方に向かって呼ぶと

間もなく、久当山の久五郎猫と陣ヶ岡の陣五郎猫があらわれました。この二匹はいつもの踊り仲間で、不思議と気が合い三匹揃うと踊りの調子も出て熱が入ります。

「久当山のオ久五郎 陣ヶ岡の陣五郎オ

橋のこんば町のオ こんば猫

みんな揃わネイト さっぱり調子が揃わネー」

と歌いながら夜の更けるのも忘れて踊ったと。

(初出『矢吹文芸十一号』藤田正雄 昭五十二 話者 浅川和茂)

河童と胡瓜

昔から村で忌みきらったたり畏れたりして作らない作物がよくあった。天王様や八坂神社を村の鎮守とした村では、神社の紋が胡瓜の切り口に似ているということで、畏れおおいので胡瓜を作らない。またそれと全く反対に胡瓜を丹精こめて作り、その初なりを神前に供えたり神前で交換したりする習慣があった。

ある夏の日の夕暮、一日の仕事を終え、疲れた馬を川に連れて行って汗をながし、足を洗い、ホツと一息ついて家にもどろうとすると、長い馬のしっぽに、なにやらぶらさがっている。よくよくみるとそれは河童だった。

おどろいて河童をつかまえようとするど河童は、「お願いします。どうかあなたの家で代々胡瓜を作らないでください。そうしたら、あなたの家の人々を水難からきつと守ってあげましょう」とたのんだという。

男は家に帰って考えた。そして河童のたのみを聞き入れて次の年から胡瓜を作らないことにした。それからこの家では代々水難には遭っていないという。

(初出『矢吹文芸十一号』藤田正雄 昭五十二 話者 浅川和茂)

●方言の響きも楽しみましょう。

小川のキツネの話

むかし ある人が白子にゴシユウギ（結婚式）よばれに
 いて、引き物の塩びきをぶらさげて、ワゲ（我が家）に帰っ
 てくるのが十時ごろになった。川をこえっぺと思い、橋を渡
 ったげっちょも、それが川の橋だがこの橋だが、わかんね
 くなっちまって、そんじも一生懸命に、川をこえっぺと思っ
 て、「おーふけーおーふけー」ど、歩いていったんだ。そし
 てワゲさ帰ったのが十二時過ぎになっちまったんだど。寝で
 もねづがんにくて、朝げになっちまった。

よく考えでみつと、キツネにバガにしらっちやみで、気
 持ちわりから、オッカごせで（奥さんのことを連れて）、
 ゆんべのどごさいってみたん
 だど。川だど思つて歩いて
 いたどが、そば畑だった。そ
 んじ、そのそば畑がジンダラ
 になつてだ。おっかど二人で
 引き物の塩びきを、探したが



どごにもねえがった。やっぱりキツネにバガにしらっちやと
 思つてワゲに帰った。（むかしよくある話）

（初出『ふるさとむかしむかし』 田内青年会

昭五十六
 話者 鶴川キン）

横山の太郎作ギツネの話

むかし 太郎作という若いもんがおつたど。

太郎作は毎日、朝から晩まで一生懸命、働いたど。それを
 見ていた庄屋さまが、「太郎作にも、そろそろ嫁さまをもら
 ってやんなかなんめえ」つて、娘さんを世話しただど。太郎
 作も喜んで、娘を嫁さんにもらうことになった。庄屋さまが
 ゴシナンすつことになって（仲人をする事になって）、太
 郎作の家がらのけえり道に、横山というどごさきたらば、一
 軒家があつた。その家によつたどころ、その家のあるじが
 「これは庄屋さま、おらげの風呂場がきあがったので、風
 呂に入つておぐんなんしょ」というもんだがら、「そんじは」
 と入つたどころ、あんまりいい気持ちなもんで、朝まで入つ
 ていだど。

そこさ、百姓が朝草刈りに横山さま来たらば、庄屋さまがタ

メオケのなかでガツバラガツバラと音たてで、体を洗っていた。百姓が「庄屋さま、タメオケの中で、何やっていなさるだ」と聞いたら、「明日は、横山の太郎作のゴシユウギ（結婚式）だで、体をきれいに洗っているごだー」というもんだが、百姓はたまげで「そこはタメオケだ」といったらば、たまげでタメオケから出たらば、クソだらけになってだという話。

〔初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四 話者 本田初之助〕

夜盗ブチのいわれ

むかしは町に行くには山道やら、田んぼ道やらとおつて、くまどの川つぶちをとつていったもんだ。くまどの川には堰の水車小屋があつて、酒米をついていたもんだが……。

村の長作と忠蔵つう人が村に用たしにいった。おそくなつて二人のけいりに、水車の家前をかちぎたもんだ。

人の家前かりんのに、黙つてはうまくねえがら、おぼんなりやしたと、ことばをかけた。するつてえと、中から夜盗が出てきて二人はしばられてしまった。そこで夜盗ブチが入つたいうごだだが、むろん、水車の人もしばられていた

いうごだ。

夜盗はとるものとして逃げでいったということだ。それから、そこんとこを夜盗ブチというふうになつたという話だ。

〔初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四

話者 角田千嘉雄〕

子ハ清水のいわれ

むかし 長兵衛と太一という親子が、子ハ清水の近くに暮らしていた。長兵衛は、仕事もしねえで、毎日毎日、酒ばつかのんで、どうしようもねえ。ある日、太一は「酒、買ってこう」つて、空どつくりつんだされたが、銭もねえし、困りに困つて「そだに、のみでげれば、

やばしえ（来なさい）」つて、清水にせでつた。清水に連れ

て行った。

太一は、長兵衛に「酒ので

る清水だ」といいたら、長兵衛

は酒だと思つて「うめえ、うめえ」つて飲んだだど。



それからその清水を「親ハ濁酒（もろはく）、子ハ清水」というようになったんだ。

（初出『田内の民話・伝説』田内青年会 昭五十四 話者 鶴川キン）

おふうさまのはなし

むかし むかし ちようめんばの池のそばに、お不動さまがあつて、その神様がなんで目の神様になつたかという話だ。お不動さまの山が火事になつたとき、なんでもたいした火事だつたみで、だれも手をつけらんねがつたんだ。「お不動さまが燃えちちまあ、お不動さまが燃えちちまあ」って、みんなが騒いだんだ。そんとき、ツブがはえあがつてきて（タニシが這い上がつてきて）、お不動さまの体にびつたし、すきなく、くっついてお不動さまを守つた。それから、目の悪い人が、ツブを喰うと目がつぶれるという伝えがでぎだ。

ちようめんばの池のツブは喰わなくなつたという話だ。

（初出『田内の民話・伝説』田内青年会 昭五十四 話者 角田ヤス）

お花キツネの話

むかし むかし 嫁さまがアブラシメ（年中行事の一つ）

第六章第二節参照のこと）には、里がえりをしたもんだが…。

嫁さまが、重箱持つて、夏なし山に来たらば、ばさまたちが四、五人して草むしりしてだど。嫁さまに「わけさ、けえんのがー（実家に帰るのですか）」と声かけたら、「んだー、アブラシメにけえんだー」と言つて、しばらく歩いていったらば、お花ばあさまがおつかけてきて、「重箱、重がっべえがら、おらが持つてやっべえ、持つてやっべえ」となんけいも言うもんだがら、「うっちやしばさまだなあ（うるさいおばあさんだなあ）」と手をはらつたらば、いきなりおつかがさちち（覆いかぶさられて）、重箱とられそうになつたんで、後ろ振り返つたらキツネだつたんだと……。

（初出『田内の民話・伝説』田内青年会 昭和五十四 話者 角田サト）

足なし坊主の話

むかし むかし 辻堂という山に、鉄砲ぶちに足をぶだれて片足になつたキツネがいた。夜になると、辻堂山を通る人は、どこからともなくでできた片足の坊主に招がれて、み

だごどもねえ山の中の寺にせでがっち（連れて行かれて）、一生懸命、坊主とお経をあげていだんだど。しばらくして、キツネ火が、カアツと燃えていだど。

いまでもそこんどこには、キツネ火が、たまにでるといううわさがあんだど。

（初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四 話者 角田サト）

あみだぼったの話

むかし むかし じさまとばさまがおったど。村では、しろかきのだんどりで忙しがった。しろかきの鼻取り（前出「神田の鼻取り地蔵」参照のこと）がみつかんねで、こまっでいだら、そこに見知らぬ子どもがでてきて、よく手伝ってくれた。しろかきもすんで、子どもにごちそうでも喰わせっかと思っただら姿はなかつたど。

そこで、じさまとばさまと手分けしてさがしまわって、阿弥陀さまのところさ來たら、阿弥陀さまが泥だらけになっいなさった。そこで、じさまとばさまは、阿弥陀さまが子どもになっって、鼻取りしてくれなさったのだと、前にもまして信心するようになったど。村の人々は、いつからともなくそ

の田んぼを「あみだぼった」というようになったど。

（初出「田内の民話・伝説」田内青年会 昭五十四 話者 角田サト）

弘法法師の話

弘法法師は、あらほど偉い人だつて。

「笑う」という字が、書けねがつたんだど。そんじ、たいそう苦労してだごごさ、その、犬めが、向こうの方から、籠被つて、走つて來たんだど。それ、こんだ、見ていた村の人たちは、皆で騒いで、それ笑つていたんだど。

そしていたならば、それ、そのない、笑つていたから、弘法様は、ああ、「笑う」という字は、竹、それ、かごない、竹かんむりに、犬つて、書いたのが「笑う」つていう字になつたつて。

そこで、弘法様は、それ、犬にそういうこと、おせてもらったから、犬に褒美ほうびをくれつべと、思つたんだげんども、犬めは、足、もとはそれ、三本しかなかつたんだど。そして、むかしの五徳ごとくちや、四本、こうはえていたんだつ



て、足が。それで、五徳に四本
いらねえいって、その、褒
美に、その犬めに、足を一
本くっちゃんだと。とっ
て、五徳から。

そしたら、犬めが、た
いそう、うんと、喜んち
やあってえ、そんで、こん
だ、今だって、シヨンベン
たれつとき、犬はこうやって、
たれつべえ。足上げて。そうやっ
て、たれんだと。もつたないがらつて。

(話者 田谷トリ 聞き取り 長尾幸子)



小僧と鬼婆の話

秋になったら栗が落ちてて、お寺の小僧が和尚さんに、
「和尚さん、和尚さん、栗が今落ちてるから、栗拾いに行っ
て来るから」って言ったらば、「お前、山に入ったならば、
奥に入らないで、近いところで拾って来るんだぞ」って、和

尚さんに小僧が言われたんだって。「だけれども、いくとき
にもしかして、道に迷ったときには、この札三枚くちやっ
から、何かあったときにや、この札を投げて、わがの願いを
かなうように、これを投げるよ」って、札、三枚もらってい
ったんだと。そしたらば、やっぱし、だんだん山奥に入っ
ていくうちに、小僧が、お寺に来る道、迷っちゃったんだって。
そして今度は夕方になったらば、明かりが見えるんだって。
あそこに行つて、なんとか助けでもらうべと思つて、明かり
を頼りに行つてみたんだと。

そしたら、そこには婆さまが一人で住んでいて、「オレ、
道に迷っちゃったんだけど、オレこと泊めてくんにか」つ
て。そしたらば、その婆さまが、「泊めつから、んじや、こ
こにいる」って。そこで、夜になったから、何かちつとこ馳
走になつたんだつべけども、その小僧のことおいたらば、鬼
婆だから、そのやること食うべと思つて、「ここさいるんだ
ぞ、どこさも行かねでいるんだぞ」って。そして小僧ことお
いて、奥の座敷の方にいったらば、一生懸命に鉈(なた)と
いっているんだと。出刃といっているんだと。それで、そつくり、
何やってるんだつべと思つて、その小僧が行つてみたらば、

出刃といでっから、「ああ、これは、オレ、ここで殺されっ
ちま」と思って、心配になって、そして今度は鬼婆に「オレ
は、とても便所に行きたくなつたから、便所にやってみらえ
ねべか」って。そしたら、このやる、便所に行くなんて、逃
げられつとしゃあねと思つて、鬼婆は、それに紐をつけて便
所までいって、この紐がくっつけてあるんだからって。ひっ
ぱって、入ってつか、入ってねか、そうして用心深く紐つけ
てやったんだと。そして、便所に入ってたって、こうして、
引っ張ってたって「まあだだ、まあだだ」って声は聞こえる
んだ。居るうちはな。だけれども何とかしてこら逃げねつけ
なんねと思つて、その小僧は、そのやつを便所の柱のどこさ
紐といつてしばつちやつて、そしてわが逃げたんだと。

鬼婆は、こつちから引っ張つて、まあだか？ って言つた
って、返事があんめ？ 今度は。逃げらつちやから。ああ、
これはこのやる逃げちやつたんだと思つて、鬼婆、便所から
出てみたらば、今、小僧が一生懸命になつてはねて、逃げて
いくとこなんだと。

「ああ、これは和尚さんにもらつてきた札を投げれば、オ
レの思いがかなうんだから」と思って、高い山にしたらば、



鬼婆登ってくるうちに、オレはたか越えられんだからと思つて、「高い山になれ」つて言つて、わが高い山に登つたら、後ろから鬼婆が、はね通しくるんだと。

ああ、今度早くて早くて、追いつかれそうになつちやつたから、今度は、「川になれ」つて言つた。そして、わがきたとこ後ろ向いて川になれ、だから、後ろ側川になつたら、「このやろ」となつて、鬼婆、また追つかけてきて、川の中、ジャブジャブ、ジャブジャブ歩つて、そしてまた、その小僧に近づきそうになつたんだと。

や、今度こそ食われつちまと思つたけれど、いや今一枚あるんだから、なんとかしてこれは行かねえと思つて、そしてまた、湖みたいになれつて。わが越えたら、その鬼婆、「このやろ、オレこと、そいに追つかけはっかけ、いんがにして」つて、その鬼婆あとから追つかけたんだ、うんど。そして、それ越えて行つたら、ちよつどわけのお寺まで来たんだと。そして今度、鬼婆、今、後追つかけて、そこ渡つて来るのに和尚さんとこに行つて言つた。「和尚さん、和尚さん、大変だ。オレは鬼婆に今、追つかけらちんだ。何とか早くしておくれ」つたらば、「んじゃ、鬼婆来たんだら、

おめはいい、中に入つていろ」つて。和尚さん、今、ちよつど餅焼いて食うところだつて。「今、この餅焼いて食べるから」「いい。和尚さん、オレ、押し込みどつか隠れる」つて。「んじゃ、そこんどこ、ちよつと隠れてろ」そして、鬼婆が、お寺に入る小僧を見たもんだから、まっすく追つかけてきたんだと。

「今、小僧めがきたつべ」つて。「きた」つて。和尚さん、嘘つかないで、「きた」つていうんだと。「んじゃ、オレこと、こういうふうにしたんだから、オレ、その小僧のこと食わねつかなんね」つて、和尚さんにいうんだと。鬼婆が、そして、「んじゃ、オレとオメと、化けつこら競争やつべ。そして、おめが勝つたらば、小僧、渡してやつて食わせつから」つて。小僧は、その押し込みの中で震えているんだと。「和尚さん、なして、来ねつて言つて嘘こかねんだつべか」つて。思つていたつて、だめだつばい、和尚さんは言つてんだと。そして、「んじゃ、そういうわけだら、その、化けつこら競争やつべ」「んじゃ、オメ先、化けろ」「オレ、何に化ければいいんだい」そして、和尚さんは、餅焼いてたもんだから、「納豆に化けろ」つて。そして、その鬼婆、納豆に化け

たつて。そして焼いた餅に納豆つけらっち、食われっちやつた。っていう話。

(話者 円谷トリ 聞き取り 長尾幸子)

親孝行なイソの話

ある貧乏な、イソっていうのと、おっかさまと、二人で暮らしていたんだと。毎日毎日、おっかさまとイソは、貧乏でろくなまんまも食わんにやくて、していたもんだから、イソは、おっかあに言つて、「オレなあ、ちつとでも役に立つように、隣の村あたりさ行つて、どつかで、子守りでもしてみらう家あつかなんだか、行つて、めつけて、子守りしてくっから」つて。そして、かけ(?)ひと部落離つちや、部落に行くのに、その川の橋を渡つて行つて、そして「んじや、オレ、今日は子守りしてくれっから」つて、頼まっち、やつて、帰りに駄賃ちつともらつて来て、親に手助けしてたわけ。毎日毎日行くうちに、橋のとこまで来つと、「イソ、おばつていきつてえ。おめの家に、イソ、オレのこと、おばつてやべ。おばつてやべ」つて言うんだつて。イソは、「オレゲさ行つたつて、ご飯も何も食わせらんにいんだから、おぶつて

たつてしゃあねから、オレ、おぶつていかね」つて、断つてんだつて。イソは。

そして、こんどある時、おっかあさまに、「なあ、おっかあ、オレ、橋渡つて来つときに、オレにおばつち、オメゲに行きてつて言う人がいるんだ。だけつと、ワゲさ来たつて、何も食わせつこともできねから、オレ断つてんだ」つて、おっかあに言つた。そして、おっかあが、「そらほど、オメに、おばつちえつて言うんだら、今度行つた帰りに、おぶつちのこと連れてこ。おぶつて、連れてこ」つて。

そして、おっかあに言わつちやから、今度また橋のふもとまできたらば、「イソにおばつて行きて。イソにおばつて行きて」言う人が



いるんだと。「そんじゃ、今度、おっかあが、おぶってこつて言ったから、オレにおぶわれ。おぶわっし」って。今度、それ、おぶって家に帰ってきて、家の玄関はいつてきて、ドサツと置いたと。そしたら、それは、人だと思つたら、「甕がめ」だったんだって。甕のなかさ、金がいっぱい入っていたもんだわ。その金で、イソとおっかあは、幸せに暮らしたんだって。

(話者 円谷トリ 聞き取り 長尾幸子)

山伏と狸の話

その昔、山伏がいて。「ほら貝」を持って歩くべ。山伏は。ポホーン、ポホーンって、鳴らしてたんだって。そして拝みに行くんだっけど、行く途中に桜の木があつて、その桜の木の根っこに狸が寝ていたんだって。狸が、山伏はポホーンやるのに、そこに行つて「ほら貝」を吹いちゃつたんだって。そして、たまげて狸が逃げてつたのよ。「ああ、オレ、ほら貝吹いたもんだから、逃げていった」っていうわけで。そして帰りに、ずうーっと、くつべと思つたらば、まだ晩かたにならないのに、暗くなつてんだって。そしたら向こう



のほうから、お棺を担いだものが来るんだって。「なんだっべ。今ころ、葬式なのかな。棺箱かついで行くんだから」。ちようど桜の木のところまで来たから、その桜の木の根っこで休んでつべと思つていたんだと。そしたらば、だんだん棺箱担いだ人が近づいてきて、その桜の木のとこまできたんだと。そしたら今度はおっかねえから、その山伏は木に登つたんだと。登つたら、その桜の木の根っこにそれをおいたんだと。そしたら、そのお棺から、足のひらなめるように、

ポヤポヤ、ポヤポヤ、マンボエン、ポヤポヤ、ポヤポヤ、って、足をなめんだと。そしてそれ、おっかなくて、山伏は心配して登っちゃって、桜の枝の端っこまで登っちゃったんだと。そして、今度、おっきっちゃって。枝がポキーンとおっきうち、下に落ちてみたら、わが覚えあるようになって、本性ついたんだって。そして、まだ明るいんだと。んじやから、狸に仕返しやらっちゃわけ。

(話者 円谷トリ 聞き取り 長尾幸子)

大根嫁

嫁が、その、「ものび」、昔は餅をつけて、そして、「わいさ泊まりに行つてこう」って、よこさっちゃわけよ。そして、その泊まり嫁が来る途中に、なんだか、キツネみでのが、チヨコチヨコ出だと思つたらば、大根畑さ入つてそして、その大根の葉っぱをもぎつて、ちよいつとこう、後ろさしよつて、その葉っぱをネンネコみでにして、その嫁様が、ヤヤ(赤ちゃん)おぶつてきたようなかっこうして、そして、その泊りさ来たんだと。その嫁よつか先に。ほして、「おどつたあー、今来たー」って。「あー、にしや(お前)、早いがっ

たなア」って、言わつち。「なあに、早く上がれ。ヤヤおろせ」ということになつたんだって。そうしてつとこさ、その後さ、その娘が、今度は、本当の娘が来て、「おどつたあー、今来たー」って言つたらば、「なんだって。さき、オレエ(我が家)の娘、来てんのに。おめえ、なんなんだあ」つたらば、「オレは、本当のここの娘なんだよ」って。したら、そのキツネが化けてつから、「オレが、先来て、オレがここの家の娘なのに。おめは、それ、キツネで、化けてきたんだ」つうわけなんだ。んで、二人で、言い争いをしたんだと。その娘と娘が。ほしたら、おどつたあ、困っちゃつてえ、なじよんしたらいがつべど思つて、ほんとの娘見分けるのには、オレも、これ、おんなじがら、とても見分けがつかねえつて。そこで、そのおどつたあが考えたのは、「んじや、これ、なんともしやあねえ。和尚さんのどこさでも行つて、何とかなの知恵借つちくつべ」と思つて、和尚さんのどこさ行つたんだと。そしたら和尚さんが、こうして考えてたらば、「んじや、たしかキツネならばこういうことは、言えねべから、オレおせでやつから、それ言わせろ」って。その和尚さんにおせらつちやのが、

カカラカエノ カミサマニ

カサニ カガマガ クツツイテ

カエサノママニ カエタレバ

カエカエガサラ カキダシタ

って、言わせろって、おせらつち来たんだわ。和尚さんに。ほして、家さ来て「んじゃ、おめら、二人どつちでもいいから言え」って。そのやつ言わせだんだと。そしたらば、ほんとの娘の方は、言わつちやどおりに、そのこと言わつちやんだべ。言うことできたの。ほしたらば、そのキツネのほうは、「カカー、カカー、カカラァ、カカラァン」って言ってたんだけど、それから、出ねんちゃったのな。そして、そのデイゴツバ（大根の葉）は、わがつちやったもんだから、ぶんなげて、「カカラ、カカラ」って、カエン、カエン、カエンって、キツネは逃げてつちやつたど。そんじ、そのデエゴ（大根）で、あの、サンマの頭とデエゴと煮て、みんなでそのやつ食べたって話だ。

（話者 円谷トリ 聞き取り 長尾幸子）

解説

円谷トリ氏は、「山伏と狸の話」「大根嫁」などのさまざまな昔話

を、父親からよく聞かされていたという。彼女の父親は、昔話をするときに、かならず、自分の身内や家の周辺の地名などをとり入れて、彼女に語って聞かせたそうである。したがって、円谷氏は、幼いころは本当にあつた話なんだと思っていたほどだという。「大根嫁」の中では、「ヤヤ負ぶつてきた嫁」は、従姉妹のお姉さんの名前で登場し、「おどつあ」は実際に円谷氏の父親、キツネと見分ける呪文を授けたのも近所のお寺の和尚さんという設定で語られたのだという。以下に収録した昔話は、さらに円谷氏が語ってくれたものを、発音や抑揚などの表現も意識しておこしたものである。活字にするのと読みにくいかもしれないが、「声に出して」読んでみて欲しい。矢吹町の言葉のぬくもりが伝わってくるのではないだろうか。

ぶんぶく茶釜

サガナ（魚）売りが、まいにち、そのー、後ろさ、その、カゴオついで、サガナ売りに歩つてたんだって。そしたらば、その、まいにち歩つたって、その、そだにサガナ買つてもらんにやくて、そして、のこちもんだつてね（残つてしまふんだね）。そすつちゅーど、うち（家）さ帰つちくつときに、その、タヌギ（狸）が、やつぱし、居でで、そして居つから、（ちよつと元気なく）

「おめなあ、オレ、今日は、サガナ売りさ、行つたんだげ

つとも、ひとつつも、サガナ売んにえがったから、おめにく
つちえぐがんな」って、いって、そのタヌギに魚をくれたん
だって。

そつたら、タヌギが、その、もらったもんだら、そのサガ
ナ売りのおじさんに、

(優しく)

「オレは、こうい(このように)に、サガナもらつてんだ
から、なにが、おめに、その、たしになって、礼してえん
だ」つていうんだど。

そつて、その、サガナ屋が、和尚さんのとこさ行つて、サ
ガナ売つてたらば、常々、たのまっちたんだつて。「オメは、
そいにして、行商して歩つてんだがら、なにが、オレ、ぶ
んぶぐ茶釜が、欲しいんだげつとも、どごがさ、いいのあつ
たらば、その、めっけでできでくんにえが」つて言わつちい。
そして、和尚さんにたのまっちたがら、んで、「何が礼して
つていうんだつたらばな、オメなあ、ぶんぶぐう茶釜にい、
化げでもらえねえべがな」つたらば、

(優しく)

「で、いいよ」つて。「オレ、ぶんぶぐ茶釜の和尚さんが欲

しいつてんだつたらば、そのぶんぶぐ茶釜に化げでやる」つ
て。

そつて、そのタヌギが、サガナもらつたお礼に、ぶんぶぐ
茶釜に化げで、そしてくつちい、そのサガナ屋は、和尚さん
どごさ、もつてつたんだど。

そつたら、和尚さん見たら、たいそう、気に入つちやつて、
「イヤ、たいしたあ、この、あのオ、茶釜はいい茶釜だ」つ
て。んだあ、「小僧、さつさど行つて、おめに、これ洗つて、
その、湯ウ、わがして飲むがら、みがいで洗つてこ」つて。

そつてその、小僧が和尚さんにいわつちやもんだら、井戸
ばだ(端)さ行つて、その、むがしは、井戸ばだつておもで
(表)さあつから、井戸ばださ行つて、ゴシゴシ、ゴシゴシ、
みがいでだんだば。そつたら、その茶釜がしやべんだつて。

(優しく小さな声で)

「こそこそ(小僧、小僧)、いでぞ。そろがに(優しく)み
がげ」つていうんだど。

小僧、たまげで、ちよいつとら、やめでみだらば、「これ
は、茶釜がしやべるはずなんだがら、それオレの耳のせいだ
つべ」ど思つて、まだ(また)、ゴシゴシ、ゴシゴシ、こう

みがいでんだって。そつたらまだ、

(優しく小さな声で)

「こそこそ、いでぞ。そろがにみがげ」っていうんだって。

こんだたまげっちゃって、和尚さんどこさ来て、

(あわてたように)

「和尚さん、和尚さん、あの茶釜ナイ、しゃべんだよ」つ

て。

(怒鳴るように)

「茶釜がしゃべるはずあつか」って、和尚さんがおこつたと。
と。

「うそだねえんだ」って。「オレに、その、いでがら、そろがにみがげっていうんだがら。しゃべってんだ」って。そしてたらば、あの、「そだはずね」って、「茶釜がしゃべるはずねんだがら、また行って水いって(水を入れて)、もつてきてここさ、かげろ」っていわちえ。小僧は和尚さんにいわれるまま、こんだ、茶釜に水をいっち、火さ、かげたんだど。

さきまでは、ほどほどお、ぬぐくなつてつから、あの、あれだど。いきもちで、タヌギもいんだげんども、だんだん、だんだん、火にかがってきてあづくなくなつちやって、その

やづ、こんだ、あの、わがあ化げっちゃってね、それ、あげっちゃってよう。そつてここは、灰かぐらにして、その、あの「かえん、かえん、かえん、かえん」って、タヌギは、もどの姿になつて、ぬげで(逃げて)いっちゃつたつて。

(話者 円谷トリ)

へつぴり嫁

そのオ、嫁様、もらつたんだつてね。そしたら、その嫁様、たいそうこの屁えたつてるもんだら、その、嫁に來たつて、屁えたつちやくて、

(遠慮がちに静かに)

「あのー、おつかさ、おつかさ。オレえ、いま屁えたつちえんだげんども」つてつたらば、

(優しくいたわるように)

「なんだい、屁え、はらたれんの。んなあ、造作あんめ」つて。「たれろ」つて。「遠慮しつことねえがら、たれろ」つて言つたつて。

「いやあ、オレ、屁たれんのは、うんとアレなんだから。じゃあ、おつかさま、あつこさ(あそこに)、つかまつてて

おぐれ」っていったど。「なんでまあ、あつこさつかまるはア、あんめ」って。ほしたらば、「いやー、オレが尻は、とでも、アレなんだから、つかまってておぐれ」って。って、「ほだごとしねだつてがら(そんなことしなくてもいいから)、たれろ」って。そしたらば、それ、嫁が遠慮しねで屁えたっちゃやど、その尻の勢いでもって、そのシールドカカサマ(お姑さん)、ふつとばされちやったんだど。つかまってねがつたがら。だ(だから)、

(あきれて途方にくれたように)

「こーだ嫁、とでも、オレゲ(私の家)さはおぐごどできねがら、おめえー、はあ、オレは、ひまくれっから、おぐつてんから、やべ」ってわつちえ。そしたあ、しゃーねーがらつて思つて嫁様は、その、おつかさまとふたんじ(二人で)、その、いったど。

だ、どちゅーまでいったらば、その、上っから、カギ(柿)がね。ほんとに、ハア、あぎで(秋で)、カギ食いごろになつて、あがぐ(赤く)なつて、なつてんだつて。

(うらやましそうに)

「やあー、あのカギイ、あの、もいで食つたら、うめがっ

べーな」ってシールドカカサマが言つたらば、

(優しく静かに)

「おつかさ、あのカギ食いでーのがい」って。「んだなあー、あのカギなあ、もがれつこつたら、ほんとにもいで一つ食つてみてな」って言つたらば、「ンダア、造作ねえ」って。「オレ、もいでくれっから」って。「おめ、もげんのが」って。つたら「もげる」って。

そつたら、嫁様、

(勢いよく)

裾すそちよいとひんむぐつたどおもつたら(裾をちよいとまくりあげたと思つたら)、

カギめがげで、

(長く)

「ぶーーっ」てたつちやらば、カギが、

(濁音を強調して)

ぼだぼだ ぼだぼだ、おちできたんだつて。そうつたら、おつかさま、

(うれしそうに、おかしそうに)

よーろこんちやつてえ、「あやややや、こーだー嫁、とー



でも、これはおんだすどこでねがら、まだ、オレエ（私の家）さ、やいでくんよ」って行って、その嫁様はそのカギをとったために、まだ、もどってきらっちゃって。こーだ、話だもんねえ。

（話者 円谷トリ）

何でも「お」

その親が、「なあ、おめー、嫁にいったらば、こどばづがいたげは、きれいにつけえよ」って。「なんでも、そのお」つけちイデオ、丁寧聞こえんだ」って。

（静かに）

「なんでもお」つけでえ、しゃべってみろ」って。ほらあ、もち（餅）だら、モチイなんて言わねえでえ、オモチって言うつちど、こどばがきれいになんだから、嫁行つたらなんでもその「お」を付けてしゃべれって。おつかさまに、おせらちちえって行つたんだって。

そして、嫁に行つたらちようど秋までで、モミをイエンメー（家の前）さ、干しとぐんだど。そしたらば、その、ニワドリ（鶏）、放しておぐもんだら、そのモミをね、ニワドリ

が、ジャッカジャッカ、ジャッカジャッカ、はあ、食べてんだって。それ、モミだから、ナイ。そしたらば、

(おっとりとして静かに)

「おかあさん、おかあさん、おトリが、あの、おニワの、おモミを、おジャツカン、おジャツカンと、お食べになつておりますよ」ってこれ、までに(丁寧に)、「お」をつけてゆつたつちど、嫁が。そつたら、そのカカサマが、「なあ、そだに『お』つけねだつて、オレゲは、ひやくしようやなんだから、そだ、『お』つけねだつていいがら、『お』はら、つけんな」って。「いいのがい、オッカサン」て。たら、「いい」って。「お」なんか、つけねだつていいぞ」って言わつちやど。

そしたらば、「あの、嫁、嫁、あのやつはどこさやつたんだあ」

つたんだつたらば、「ねえ、おかあさん、アレ『ケ』のなかにあります」って、「『ケ』なかにあります」つんだつたら、おつかさま



は、わがねんちやつたつて。なんだか。なんだつたつたらば、『お』つかな(使うな)つてつたもんだから、嫁様は、オゲ(桶)のなかさあるやつを、『ケ』のなかさありますつたつたつて。そーゆう、バカ嫁さんもいんだつて話だ。

(話者 田谷トリ)

^{じんく}甚句 (リズムごとに言葉を区切つてある)

ハァ、ハァ、アノヨ

むがしい、むがしいのオ、そのまだア、むがしいヨオ、そのまだア、むがしいのオ、ちよつとむがしだと、弘法法師どオ、いうひとオはア、あれほどオ、学者なア、人でさーえ、

笑うとオ、いう字がア、書けないでエ、たいそう苦勞をしたそうな。

そのどき、

むこうの方から、

犬めが、カゴをかぶつてエ、走りくる、それをオ、見ていたア、村の衆が、みんなでエ、騒いでエ、笑つてエ。

そこでエ、弘法法師さん、やっとお、お悟りにイ、なりまアしてエ、

笑うとお、いう字は、

たげエ(竹)かんむりに、犬と書ーグウ

そこでエ、弘法法師さん、犬にイ、ほうびをオ、あげようどオ、

むがしのオ、ゴドグ(五徳)に、足がよう、四本(シホン)

あーる、

犬めにイ、足がよう、三ぼーんでエ、

ゴドク(五徳)にイ、四本(シホン)はア、いらないうと、

一本とつて、

犬にイ、ほうびにイ、くれてやーリヤ、

犬めは、たいそう、よろごんでエ、

弘法法師にイ、もらったア足に、

おしっこオ、ひっかげつちやア、もったいーないど、

今でも小便たれつときゃ、

かだアあしイ(片足)、もちやげエでえ、ようほい、

アアアアア、おしっこオ、すーるーぞなア

(話者 円谷トリ)

甚句

浅草の 観音さんの 前でヨオ、アラ、

ゴヤゴヤするのが 市ともいう、

車に積むのが 荷ともいう、

女の大厄 産ともいう、

子どものシヨーベン シイともいう、

白黒並べて 碁ともいう、

昔の侍 禄ともいう、

品をやつて 金をとるのが 質ともいう、

女の月厄 恥ともいう、

心配するのが 苦ともいう、

アラ、ジユウツというのは 何じやいな、

鍛冶屋さんが 朝おきて、

鉄を真つ赤に 焼いで、

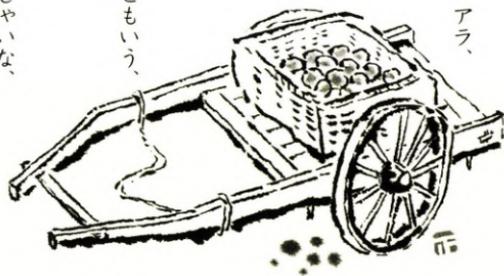
水に冷やせば、

何だ、兄弟よ、

ハアアアア、ジユウともいう

ハアアアア、ジユウともいう

(話者 円谷トリ)



一一 ふるさとのことば

今、方言に大きな変化がおきてきているようだ。

かつてはこうした章の冒頭には、「テレビやラジオの発達によつて標準語が浸透してきて、方言が失われつつある」云々といった文がよくみられた。マスメディアの発達により方言よりも、標準的な言葉が使用されるようになってきたのは確かなことなのだが、最近はこちらと様子がかわってきている。

とある大手のコンピュータソフト会社で、方言に対応した日本語変換システムが開発された。方言特有の表現も、正しく変換されるといふものである。これまでに「北海道東北」「九州」「関西」「中部北陸」などのバージョンが発表され、すでにパソコンや携帯電話での利用が可能となっており、電子メールなどの文書作成に用いられている。さらに、インターネットを通じて全国の人たちが地域ごとに方言を紹介しあい、独自に語彙収集をおこなっているウェブサイトなどもある。このように、かつては方言を衰退させてきた一翼を担うマスメディアが、今、逆に「方言の復権」に一役買っているのである。

電子メールという最先端のコミュニケーション手段において、方言が注目を浴びているのは、「文字」によるコミュニケーションには限界があることと無関係ではない。実際、利用者には、方言を使った方が「温かみがある」「微妙なニュアンスが伝わりやすい」などといった理由でこのサービスを利用していている。

コミュニケーションには、バーバルコミュニケーション（言葉によるコミュニケーション）とノンバーバルコミュニケーション（非言語コミュニケーション）。表情や動作などによるコミュニケーションがある。電子メールは、もちろん前者である。方言も文字にしてしまえば前者であるが、たとえ文字に変換されていても、方言には地域ごとに独特の発音と抑揚があり、それを記憶している人々の脳裏ではその音声が再生されることになる。「私の家へきてください」と送信するよりも、「オラげえ、こら

っしえい」などと送信した方が、確かに親しみがあるように感じられるだろう。

この章を駆使して、「矢吹町の方言」で電子メールを送信してはいかがだろうか。

なお、以下に、記載した矢吹町のことわざや方言は、先の町史編纂事業の際に、収集されたものの、惜しくも当時は載録されずに終わった(故)鈴木栄氏の調査結果に基づくものである。

(一) 俗信とことわざ

【気象に関する俗信など】

- ・秋の日は釣瓶落し・「釣瓶」は、井戸水を汲むための道具。秋は、あつという間に日が暮れてしまうということ。
- ・朝おきてクボ(クモ)の糸がかかっていると天気が良い。
- ・朝虹 糞ほごせ、夕虹 糞を巻け・朝の虹は晴れる。夕方の虹は雨が降るということ。糞とは糞でつくった合羽のこと。雨天で農作業をおこなったり、外出したりするときに着た。「ほごせ」は「脱げ」、「巻け」は「着ろ」ということ。
- ・朝焼けは、天気が悪い。
- ・暑さ寒さも彼岸まで・夏の暑さも冬の寒さも、お彼岸(春分の日・秋分の日ごろ)までには和らぐということ。
- ・蟻が行列をつくるときは、雨。
- ・寒九の雨・寒の入り九日目が雨なら豊年。「寒九の水」「寒九の薬」とも。
- ・ケヤキの芽が一斉に出ると遅霜がない。
- ・子どもが夕方まで騒げば、雨。
- ・寒いはコタツ、温ぬくいは雪隠せつたん・雪隠はトイレのこと。寒暖のたとえ。
- ・ざくろの芽が出れば、霜しもは降らない。

- ・霜の多い日は、天気がよい。
- ・赤飯に汁をかけると、嫁にいくとき時雨しぐれが降る。
- ・たばこが湿れば、雨が降る。
- ・月がかさかぶれば、雨。
- ・西山晴れば明日天気、曇れば雨。
- ・猫が体を洗うとき（体をなめて毛づくろいをしているとき）、鼻先だけなら天気が悪くなる。耳こせは天気がよくなる。
 - ・毛づくろいをしている猫をみると「耳こせ、耳こせ」と願った。
- ・猫が草を食うときは、次の日は雨。
- ・八十八夜の別れ霜・八十八夜をすぎれば、霜は降りないということ。
- ・春の雪と女の腕まくりは、たまげつことない・大事にはならないから。
- ・彼岸すぎて麦の肥、土用すぎて稲の肥。
- ・ブヨが夕方多く飛ぶと、雨。
- ・モクレンの花が上を向けば日照り、下を向くと雨年。
- ・矢吹の汽笛は晴、石川の汽笛は雨。
- ・山で腕を洗うと、雨が降る。
- ・夕鳩ないて、空みるな・天気が変わる。
- ・夕日が赤ければ明日は天気、朝日が赤ければ雨。
- ・夕焼けに、鎌を研げ・つまり明日は晴れるから、農作業の準備（この場合は特に秋の稲刈りのこと）をしろということ。
- ・雪は、豊年のしるし。

- ・四つ日照り 五七の雨に 九は病・地震占い。それぞれの時刻におきた地震にあわせて災いがおきるということ。
- ・雷様の多い年は、豊作。

たとえ

- ・開いた口にボタモチ・思いがけない幸運が転がりこんでくること。「棚からぼたもち(棚の上のぼたもち)」ともいう。
- ・青ケツの抜けない人・お尻に蒙古斑のあるのは子ども。つまり精神的に幼い人のこと。
- ・上げ膳、据え膳・待遇がよいこと。
- ・足の裏についたママ粒・「俺のことを、足の裏についたママ粒」ぐらいにしかみていない」と使う。ようするに、気にも留めていないということ。
- ・頭でっかち尻つぼみ・最初の意気込みだけはよくて、だんだん勢いがなくなっていくこと。
- ・頭の黒いネズミ・人間のこと。
- ・アダを恩で返す・「恩をアダで返す」ともいう。誠意を踏みにじること。
- ・あてとフンドシ、先から外れる・あてにしていることは相手の都合次第で外れる。
- ・後の雁が先になる・後ろの者が追い抜いたり、年上の者より年下の者が先に死んだりすること。
- ・後は野となれ山となれ・目の前の問題が解決したなら、後のことはどうなろうと知ったことではないということ。
- ・危ない橋を渡る・危ないことを承知であえてやるということ。
- ・雨が降るのも嫁のとが・「嫁のとが」は「嫁のせい」ということ。
- ・痛くもない腹を探られる・身に覚えのない疑いをかけられること。
- ・イタチの道切・交際や音信が途絶えること。

- ・一匹ざし・大物だということ。
- ・犬にぶちつける土もない・あまりにも貧しい状態のこと。
- ・犬の遠吠え・陰で強がったり、悪口をいったりすること。
- ・命の洗濯・気晴らし。
- ・いやしっこ、こじっこ・食いしん坊のこと。
- ・兎の罠に狐がかかる・予想外のことがおこること。
- ・後足で土をかける・裏切ること。
- ・大川でケツを洗う・カラツとする、すつきりすること。
- ・奥菌に物がはさまる・いいたいことをいわずにいる状態。
- ・お里が知れる・育った環境がわかるといふこと。
- ・同じ穴のムジナ・(悪いことをしている) 同じ仲間だということ。
- ・お山の大将 俺一人・小さい世界でいばっていること。
- ・及ばぬ鯉の滝登り・どんなに望んでも、とうてい無理ということ。
- ・女の尻と猫の鼻・冷たいということ。
- ・女は三界に家なし・三界とは、前世、この世、あの世の三つの世界のこと。女性の立場の低さを喩えたことば。
- ・蛙のつらに小便、馬の耳に念仏・まったく無関心の様子。
- ・駕籠に乗る人、かつぐ人・さまざまな地位・職業の人がつながつて世の中は成り立っているということ。
- ・金槌かなづちの川流れ・うだつの上がない人のこと。「才鉏さいいぢの川流れ」とも。
- ・金火箸かねびしのよう・ひどくやせているということ。

- ・鉄かねの草鞋でさがす・辛抱強くさがすこと。
- ・川向かむかこの火事・「対岸の火事」とも。あまり関係がないこと。
- ・木に竹を接ぐ・釣り合いがとれない、不自然で筋が通らないこと。
- ・絹ぬいぶるい・ものがたい人。
- ・兄弟喧嘩は鴨の味・止められない。
- ・金時の火事見舞い・酒を飲んで真つ赤になること。
- ・口と腹でんでんこ・いつていることと気持ちがちがぜん違ふこと。
- ・口も八丁手も八丁・調子のいいこと。
- ・暗がりから牛・動作が鈍いこと。ものの区別がはつきりとしなないこと。
- ・肥だめから生まれた・貧しい身分の生まれのこと。
- ・乞食こじきが馬持こじきつたよう・身分に不相応なものを持つことのとたとえ。
- ・乞食が米こぼしたよう・ぶつぶつ文句をいうこと。
- ・魚うしが水を離れたよう（魚が木に登る）・無謀なこと。
- ・仕事は判任官、飯は大蔵省・仕事は半人前なのに、ご飯は一人前に食べる人のこと。
- ・地藏（仏）の顔も三度・なにをやっても許してもらえないのは、三回までということ。
- ・白河夜舟・熟睡すること。
- ・尻が割れる・悪事やたくらみがばれること。
- ・尻に帆かける・逃げ足のこと。
- ・醤油で煮しめたよう・そのくらい汚れて黒くなっているということ。

- ・タドンに目鼻・顔が色黒の人のこと。
- ・頼まれれば越後から米つきにくる・越後の人たちはかつて出稼ぎにやってきていた。そこからでた、よく手伝いをするをあらわす表現。
- ・大工の塀を立て・自分のこととなると手が回らなくなる。
- ・旦那泣かし田・山陰の田んぼのこと。手入れをしても得るものがないものこと。
- ・提灯ちようたん持ち、川にはまる・人を導くつもりが、逆に自分がしくじってしまうこと。
- ・月夜に提灯・意味のないもの。
- ・爪で拾って箕でこぼす・苦勞して少しづつ貯めたものを、あつという間に使い果たしてしまうこと。
- ・釣り落とした魚は大きい・手にいれることのできなかつた利益は、大きかつたということ。
- ・つんぼの早耳、つんぼの立ち聞き・悪口やこちらの不都合なことは素早く聞きとる人。
- ・当年子馬（トウネッコ）の朝っぱね・若い人は朝から元氣。
- ・遠きを知りて近きを知らず・他人のことはわかるのに自分のこととなるとわからなくなる。
- ・道楽者の節句働き・怠け者に限つて、人が休んでいるときに働く（ろくなことがない）。「怠け者の節句働き」「のらくら者の節句働き」「不精者の節句働き」とも。
- ・トマトがなると医者泣かせ・それだけ栄養があり、食べると丈夫になる。
- ・泥棒つかめて縄もじり・ことがおこつてから、準備をすること。
- ・泥棒に追銭・損をしたうえにさらに損をすること。
- ・夏のはたまち 犬でも食わない・まずいから、犬も食べない。さらにそこから、「夏の餅は嫁に食わせろ」とまでいう。
- ・菜っぱに塩・元氣なくしおれてしまうこと。

- ・二階で尻をあぶる…あまり効果がない。
- ・猫にまたたび、泣く子にお乳…好物。
- ・猫のしつぽ…あつてもなくてもよいということ。
- ・のべ紙に火…べらべらと話をする人。
- ・箸より重いもの、持ったことない…重いものを持たない人のこと。過保護に育った(育てられた)人のたとえ。
- ・裸でバラ背負う…過酷かこくな仕打ちのこと。
- ・肌を粟を生ず…恐ろしい目にあうこと。鳥肌が立つということ。
- ・針ほどの事を棒ほどにいう…大げさ。針小棒大。
- ・馬鹿と鶏…すぐに忘れる。
- ・馬鹿と肥はおいたまま…あまりかまうな、ということ。
- ・馬鹿の大食い。
- ・馬鹿の一心…一つのことには一生懸命になること。
- ・日暮れて道遠し…歳をとつてもまだまだなすべきことがたくさん残っていること。または期限が迫っているのにまだ物事ができあがっていないこと。
- ・膝とも談合…相手が拒否できないような強い態度で交渉すること。
- ・人のフンドシで相撲をとる…他人のもので利益を得ようとする事。
- ・ヒョウタンの川流れ…落ち着きのない様子。
- ・ひろげた風呂敷はいっぺんにしめられない…大げさな話やウソは、收拾しゅうじがつかなくなる。
- ・下手の長談義…話下手のダラダラした長話のこと。

- ・ 下手の物好き・下手なくせにむやみに熱中すること。
- ・ ほぞをかためる・決心すること。
- ・ 螢のケツ・狭い範囲のこと。
- ・ 味噌糞一緒・なにもかも区別をしないで一緒にしてしまうこと。
- ・ 味噌をつける・失敗して恥をかくこと。
- ・ 三日せいろく・あきつばいこと。
- ・ 胸に釘くぎ・弱点をつかれてドキッとすること。
- ・ 目あき千人盲めくら千人・ものを知ってる人も知らない人も多いということ。
- ・ 目から入って鼻から抜ける人・賢い人。抜け目のない人。
- ・ 飯粒で鯛をつる・少ない投資で多くの利益を得る。
- ・ もらうときは地藏顔・自分が得をするときだけ笑顔でいる。
- ・ 焼けぼっくりに火がつき易い・縁の切れていたものがもとの関係にもどる。「焼けぼっくり」は燃えさしの木。男女関係にいうことが多い。
- ・ 嫁泣かし・広い田んぼのこと。
- ・ 夜の豆に外れるな・豆で達者で、ということ。
- ・ 両方がいいのは頬ほかむり・知らん顔のこと。
- ・ 労して功なし・苦勞しても、なんの成果もあがらないこと。
- ・ わが悪いというのは米つきばかり・打たれてばかり（搗うかれてばかり）いるから。

その他

- ・商いは飽きない。
- ・悪妻は六十年の不作・「カカの悪いのは六十年の不作」ともいう。「六十年」をさらに「百年」という場合もある。
- ・朝起き三文の得(朝起き千両)・早起きは得をするということ。
- ・朝茶は三里いっても戻ってよばれろ。
- ・朝の蜘蛛は福がくる、夜の蜘蛛は盗人がくる。
- ・足下の明る内・「万事早めに(やっておきなさい)」ということ。
- ・アズキは馬鹿に煮らせろ・アズキは、ゆつくりとトロトロ煮るので。
- ・頭の上のハイを追え・「ハイ」は蠅のこと。矢吹では「エ」の発音が「イ」になることが多い。「己の頭の蠅を追え」とも。
- ・新しいものをおろすときには東を向いて笑え。
- ・あぶく銭身につかず・お金は、はじめに働いて得ないといけないということ。
- ・蟻の穴から土手の崩れ・ほんの少しの油断や不注意でも、失敗につながるとのこと。
- ・あるようでないのがお金、ないようであるのが借金。
- ・あわてる乞食は、もらいが少ない・焦つてもものごとを進めてはいけないということ。
- ・家柄よりイモガラ・イモガラはサトイモの茎を乾燥させたもの。お味噌汁の具などにして食べるとおいしい。つまり、名よりも実だということ。
- ・意見と餅はつくほど練れる。
- ・石部金吉 金かぶと・はじめ一方の人物のこと。
- ・一に看病、二にくすり・人の優しさやぬくもりがなにより。

- ・一ほめられて、二にくまれ、三はさんそで、四風邪引き・「くしゃみ」の回数占い。「さんそ」とは悪口のこと。
- ・一利有れば一害あり。
- ・いま鳴いた鳥、すぐ笑う・泣いていた子が、笑ったときにいう囃ことば。
- ・鯛の頭も信心から・つまらないものでも信心の仕方で尊いものになるということ。
- ・隠居見子（娘）は三文安い・「隠居息子三文安い」ともいう。おじいちゃん・おばあちゃんに面倒をみてもらった子どもは甘やかされているので、嫁（婿）のもらい手がないということ。
- ・印形は首ととりかえ・印鑑は大切にしなければいけないということ。
- ・上の歯が抜けたら縁の下、下の歯が抜けたら屋根の上に投げる。
- ・魚心あれば水心あり・相手の出方次第で、その後の対応も変わってくる。
- ・丑年生まれうしじまの人はウナギを食わない。
- ・牛は牛づれ 馬は馬づれ・人は付きあうときには、それぞれ対応の相手がよいということ。
- ・牛も千里、馬も千里・遅いか速いかの違い。
- ・氏より育ち（生まれより育ち）・家柄よりも育った環境の方が大切。
- ・うそつくと鬼に舌（ペロ）ぬかれる。
- ・うそはどろぼうのはじまり。
- ・嘘も方便・嘘は悪いことだけれど、場合によっては必要なこともある、ということ。
- ・ウチの米の飯より、隣の麦飯・「隣のほたまち」「隣の麦飯」「わが家の白飯より隣の麦飯」とも。つまり他人のものは、悪いものでもよくみえるということ。
- ・馬と田地は食い逃げしない・手入れをした分だけ役に立つということ。

- ・馬には乗ってみよ、人には添うてみよ…何事も外見だけではわからない。使ったり、付きあつたりしてみてもはじめて物事の本質がみえてくる、ということ。
- ・うめてよし…古い井戸を埋めるときに梅とヨシ(葭)を使う。そこで、「梅て葭」をかけて「埋めてよし」ということ。
- ・噂をすれば影がさす(影とやら)…噂をしていたら本人が現れたということ。
- ・縁なき衆生は度し難し…人の忠告を聞き入れようとしない人は救いようがないということ。
- ・大風が吹けば桶屋が喜ぶ…ものは、めぐりめぐって意外なところで思いがけない結果を招く。
- ・大金とるより小金とれ。
- ・お棺にあうと縁起がいい。
- ・押し強いのが勝ち…強引にすすめてしまった方がいい結果が出る。
- ・男はヒキイをまたげば七人の敵あり…ヒキイは敷居。
- ・男やもめにウジがわき、女やもめに花が咲く。
- ・表をみて裏をみず。
- ・親子の中でも金銭は他人。
- ・親の意見とナスビの花は千に一つの無駄はない。
- ・尾をふる犬はたたかれず…迎合げいごうしていれば憎まれない。
- ・女三人よればやかましい(姦かましい)。
- ・書かずとも読めさい(え)すれば学者なり。
- ・隠すより現る、隠れたるより現るはなし。
- ・火事と喧嘩はできぬうち。

- ・火事の夢はよい。
- ・風とカバネは夕方やむ・「カバネ」とは体のこと。つまり、「風は止む」「体は病む」をかけている。
- ・家畜の一卵性の場合、メスの方には子どもができない。
- ・カニの横這い・はたからみれば不自由そうにみえても、その人にとっては一番よいことだということ。
- ・カニは甲羅こうらに似せて穴を掘る・身分相応が大切。
- ・金は三欠さんけつくにたまる・「三欠く」とは、三つのこと（義理・人情・交際）を欠くということ。
- ・亀の甲より年の功。
- ・からっこ白（空白）はつくぬ（物が増えない）。
- ・からつんぽには、小便屋から小便をとってきて耳につけると治る。
- ・借り着するなら洗い着しろ。
- ・借りるときの地藏顔、返すときの閻魔えんま顔。
- ・勘定あつて銭たらず。
- ・堪忍は一生の宝。
- ・昨日の人の身 今日是我が身。
- ・窮すれば通ず・開き直って苦境を切り抜ける手段がみつかる。
- ・喬木きよげは風に折れる・ぬきんでている者は、災厄を受けやすい（喬木とは背の高い木のこと）。
- ・義理とフンドシ欠かされぬ。
- ・食うだけなら犬でも食う。
- ・薬もすぎれば毒となる。

- ・口と財布は閉づるに利あり…口も財布も「閉じて」いれば、災いから免れる。「開いているのは災いの元」とも。
- ・口に入る物はあんまの笛でもよい。
- ・口はわざわいの門。
- ・苦は楽の種。
- ・煙の立つところ必ず火あり。
- ・けんぞく施主に似る…一族は家長に似る。
- ・下戸げこのさか恨み…お酒を飲めない人は、お酒を恨めしく思うということ。
- ・下戸げこの立てた蔵はない…下戸とはお酒を飲めない人のこと。
- ・乞食三年するとやめられない…「三年」は「三日」ということもある。
- ・乞食と茸取りは細かく歩け…実入りが多くなるから。
- ・乞食の子でも三年たてば三つになる…親がなくても子は育つということ。
- ・子どもが母親の股またをのぞくと次の子が生れる。
- ・子どもが火わすらをすると寝小便をする。
- ・子どもと川原の石は冷えるほどよい…「わらしと川原の石は冷えるほどよい」とも。
- ・子どもの熱冷ましには、ミミズを煎じて飲ませろ。
- ・ご飯を炊いて、いつもと色が違うときは悪いことがあるので気をつけろ。
- ・子持ち使うならピッコ使い(え)…子どもを使うよりは、能率が上がるということ。
- ・五月実家に帰るのは怠者…五月は田植えの時期。一番農家が忙しいときに里帰りする(お嫁さん)のは、怠け者のすること。
- ・触らぬ神にタダリ(祟り)なし…消極であることは美德という意味。

- ・三度目の正直…一、二度失敗しても三度目はうまくいく。あるいは三度目で本物になるなどの意味。
- ・サンマが出ればあんまが引っこむ…サンマの栄養で、病気がなくなるから。
- ・座頭に提灯…座頭とは、盲目の人。目のみえない人に提灯を持たせても仕方がない。「めくらに提灯」ともいう。つまり、意味のないこと。
- ・仕事は多勢、甘い物は小勢…仕事はみんなで、でも甘いものは少ない人数で食べた方がいい。
- ・四十くらがり、五十まっくら、六十パツチリ。
- ・杓子は耳かきにならない…中途半端で役には立たないということ。
- ・しゅうとの頭と麦畑は踏むほどよい。
- ・知らぬは亭主ばかりなり…身近なことに気づかない。
- ・詩をつくるより田をつくれ…文学に熱中する人たちに向かつていう言葉。
- ・心配は身の毒。
- ・地震のときは竹藪へ逃げろ。
- ・蛇の道はへび…同類の者にとつて同じ仲間のことならなんでもわかる。
- ・すきつ腹に飯、泣く子にお乳…望んでいたものが、タイミンクよくかなえられること。
- ・ずない大根 辛くない…「ずない」は大きいの意味。
- ・せつないときの神だのみ…困ったときの最後の手段は、神様に頼ること。
- ・節句せつせと盆にぼつくり…節句には休めということ。休まないで、盆に死んでしまうぞという意味。
- ・節句にはシヨウブとヨモギの風呂にはいれ。
- ・千三つ、万カラ…嘘つき。

- ・ 田植えの夢はよくない。
- ・ タスキかけより心がけ。
- ・ 他人の飯を食え・世間の荒波にもまれて辛い経験をせよ。
- ・ 足袋をはいたまま寝ると、親の死に目にあえない。
- ・ たまげた、こまげた、びった下駄・「びった下駄」とは菌の減った下駄のこと。
- ・ 短気が出たら指をなめて乾くまで待て。
- ・ 使っている鍬は光る。
- ・ 漬物辛いのはシンシヨウもち・おかずがいらぬから。
- ・ ツバメが巢をつくると、その年は縁起がいい。
- ・ デビ（出額）に馬鹿なし。
- ・ 同級生が死んだ時は耳をふさげ。
- ・ 十で神童、十五で才子、二十歳すぎればただの人。
- ・ どのほうのかえちや恨み（さか恨み）・自分の悪事を棚にあげて他人を恨むこと。
- ・ 長い客には箒はらを逆さまに立てろ。
- ・ 長いものには巻かれろ・「大きい物にはまかれろ」とも。
- ・ なくて七癖 あつて四十八癖・だれにでも癖はあるもの。
- ・ 夏の火は嫁にたかせろ・嫌なことはお嫁さんにさせろということ。
- ・ なりふりにほれるなら雷様にほれる・「鳴り降り」だから。
- ・ 憎い者には爪てを煎煮じて飲ませろ。

- ・女房と米の飯は飽きない。
- ・女房と畳は新しい方がよい。
- ・女房と味噌は古い方がよい。
- ・にらんにんにく、にんぎり屁、日向にたれ糞、干し納豆・臭いものづくし。
- ・人情味がある家にはツバメが巣をつくる。
- ・寝起き食いおき馬鹿がする。
- ・猫と子守りは神ごとなし・「神ごと」とは、休日のこと。
- ・寝るのも仕事のうち（稼ぎのうち）。
- ・畑はよせから、田は中から・土の耕し方。
- ・裸馬に荷はつけられぬ・準備不足のこと。
- ・初物を食べば七十五日長生きする。
- ・八卦はっけ八つあたり・占いはあたることもあれば、あたらないこともある。
- ・話は裏さけ・本意・真意をみぬけ。
- ・話早いうち ぼたもちぬくいうち・単に「ぼたもちは温かいうち」とも。
- ・話半分 腹八分・ちようどいい具合のこと。
- ・はねる馬は死ぬまではねる・元気な人は死ぬまで元気。
- ・腹の皮がはれば目の皮がたるむ。
- ・腹八分目に医者いらす。
- ・馬鹿の大足、利口の小足。

- ・ 人に入癖、馬に馬癖・人それぞれだということ。
- ・ 人のうわさも七十五日。
- ・ 人を祈らば穴二つ・自分にはねかえってくる。
- ・ 人を呪えば穴二つ・他人を呪うような悪いことをすると、それは結局自分にはねかえってくる。
- ・ 百姓の来年・来年こそはと期待すること。
- ・ 百日説法、屁一つ、百聞は一見にしかず。
- ・ 火をみたら火事と思え・火の用心。
- ・ 不釣りあいは不縁のもと。
- ・ 風呂の辞儀は水となる・お風呂は遠慮しなくていいということ。かつては、「もらい風呂」といって、お風呂を焚いた家に入浴にいった。お風呂は毎日その家で沸かしてはいるようなものではなかった。「湯の辞儀は水になる」ともいう。
- ・ 屁くさ虫わが身知らず・自己中心的な人のこと。
- ・ 屁と火事は元からさわぐ・「屁の元、火事だ」とも。
- ・ ヘビの姉様の赤い実を潰さないで飲み込むと、痔じろうが治る。
- ・ 吠える犬は食いつかねえ。
- ・ ほしがるより惜しがれ。
- ・ ほめる人に買ったためしなし。
- ・ ほれて通えば千里も一里。
- ・ 本を貸すバカ、返すバカ・本は大切に貴重なもの。
- ・ 孫飼うなら犬飼い（え）。

- ・ 柿をかぶせておくな。(良いものはいってこなくなる。)
- ・ 味噌は柿の葉落ちぬうちに漬ける。
- ・ ミミズに小便をかけるとチンチンが腫れる。
- ・ ミヨウガを食べると物忘れをする。
- ・ みるは目の毒。
- ・ 六四八二七(ムシヤフナ)・・米粒一升の数。
- ・ 娘三人持つと灰までなくなる。
- ・ 名所に見所なし。
- ・ 目薬より寝薬。
- ・ 飯食いと道歩きは早いほどよい。
- ・ 餅の丸めがうまい女は、旦那・子どももいい人だ。
- ・ 物事をなかなか思い出せないときは、指をなめておでこにつける。
- ・ 桃栗三年、柿八年、柚この馬鹿野郎、十六年・実を結ぶのにかかる時間。
- ・ 屋敷に大木 家に年寄り・・古いものは必要。古いものも大切にということ。
- ・ 夢は五臓のつかれ。
- ・ 嫁と姑が仲がよいとケチがはいる。
- ・ 嫁と坊主は家持たず。
- ・ 嫁は姑に似る。
- ・ 理屈と膏薬(とんぼ口、かどくち)はどこにでもつく。

・忘れることは美徳なり。

禁 忌

「くするな」といわれるもの。なお、各章において扱われているものもある。

・青田のツブは嫁に食わずな・「ツブ」とはタニシのこと。かつては重要な食料の一つ。おいしいものなので、嫁なんかには食べさせるな、という意味。かつての「嫁」の立場の悪さを物語るもの。

・秋のナスは嫁に食わせるな・「青田のツブ」同様の意味で使われるときと、「種がない（子どもができない）」「冷える」などの意味で使われるときとがある。

・金物で鍬の土を落とすな・鍬に傷がつくから。鍬は大切な農具。

・元日には金を使うな・金遣いの荒い一年になるから。

・櫛を拾うな・櫛は「クシ（苦死）」に通じるため。

・下駄はいて餅をつくな。

・粉こな糠三合あつたら婿にゆくな・婿はむこ惨めだから、という意味。

・逆さ柱を使うな・家を建てるときの禁忌。

・四月中十日ころくない馬鹿につかわれるな・農繁期に、計画性のない人に使われると苦勞をする、という意味。

・正月四日は年始に歩くな・お坊さんの年始の日だから。

・すりこぎ棒のように命を粗末にするな・すりこぎ棒は、使っているうちにだんだんすり減っていつてしまうことからきたことば。

- ・節句には畦あぜを踏むな・節句に働くなということ。
- ・トラの日と八日には裁ちものをするな・「巳の日トラの日に着物を裁つな」ともいう。
- ・酉年生れの人は、ツブ（タニシ）を食ってはならない。
- ・二月八日は針を使うな・二月八日は針供養の日。
- ・ハトの子をとってはならない（繁栄しない）。
- ・彼岸またぎするな・春秋の彼岸を区切りとして仕事の計画を立てなさい、ということ。
- ・一つたらいで二人洗うな・葬式後の洗濯は、二人ですることから縁起が悪いとされるため。
- ・仏滅と卯の日は祝いごととするな。
- ・ヘラをなめると食物に困る。
- ・豆と女に手を出すな・止められなくなるから。
- ・水口にもち苗植えると食えない（食えない）人が出る。
- ・夜爪を切るな・「世（命）をつめる」という語呂ゴロから、縁起が悪いという意味。
- ・嫁の家から猫連れていくな・旦那さんを大事にしなくなる。
- ・夜は塩というな・ではなんというのかというと「なみのはな」という。

(二) 方言

ア

アカマツカ	真紅
アガマツカ	
アクシヨ	くしゃみ
アキシヨ	
アクシヨ	
アグ	あご
アグ	灰
アケエベ	晴れ着
アシド	足跡
アスブ	遊ぶ
アツカイ	ありますか
アツグ	あそこ
アツタマル	暖まる
アツパ	唾者
アツパイ	あるだろう
アツパトツパ	あせった
アツバル	集まる

アツペ	汚い
アツペエ	あるだろう
アツポ	大便、くそ
アツボツテエ	厚い(熱い)感じ
アブク	泡
アヤマツタ	困った
アラカタ	だいたい
アワクツタ	あせった
アワバナ	おみなえし(植)
アンニヤ	兄
アンネ	姉
アンベエ	調子、具合
アンヨ	足
イ	
イイベ・イガツベ	いいだろう

イガナンネ	いかなければなら
イガナンネー	ない
イキバル	威張る
イキマガイイ	元気がいい
イゲ	いけ
イダ	あった、いた
イダガイ	居りますか
イツカル	重なる、のせる
イツケル	
イツクラ	何度も、何回も
イツコイツコ	ねこやなぎ(植)
イツチカル	座る
イツチガル	
イツチョ	いつも
イツテイ	一体
イツピテ	いつも
イツペエ	たくさん
イマツト	もっと

オツタマゲル びつくりする
 オツベス ごまかす
 オツポロツタ 紛失した
 オデントサマ 太陽
 オドゲル 冗談をいう
 オトツツア お父さん
 オドデ 一昨日
 オバ 下女
 オヒトツ おてだま
 オブ お湯
 オメイ お前
 オモイナシ 力いっぱい
 オモシヤイ 面白い
 オモシヤクネ 面白くない
 オモデエ 重い
 オラゲエ 自分の家
 オンダス 追い出す
 オンツア ン おじさん
 オンツア ン

カ

オンツアレル 叱られる
 オンバ おばさん
 カセル かぶれる
 カスカダル カスカダレ
 カシラツバ カシラツバ
 ガサヤブ ガサヤブ
 ガキメラ ガキメラ
 ガギメラ ガギメラ
 カカリゴ カカリゴ
 ガオル ガオル
 カエツベ カエツベ
 カイルツバ カイルツバ
 カイチャ カイチャ
 裏返しに
 おおばこ(植)
 帰ろう
 弱る
 相続人
 子どもたち
 荒地の藪
 柏の葉
 生意気をいう、お
 せっかいするな
 皮
 皮
 裏返しに

カタビツコ 別々のもの
 ガツカ お母さん
 カツケナス カツケナス
 カツコナス カツコナス
 カツコ ゲタ
 カツコワリ カツコワリ
 ガツコワリ ガツコワリ
 カツチギル カツチギル
 カツツアゲ カツツアゲ
 カツツエワシ カツツエワシ
 カツベズル カツベズル
 カナカナゼミ カナカナゼミ
 ガナル ガナル
 ガニ 蟹
 カバネヤミ 骨惜しみ
 カブツク カブツク
 食いつく、かみつ
 く
 ごまかす、盗る
 削る
 ひぐらし
 大声でわめく
 引っかく
 爪でかく
 忙しい
 きまりが悪い
 悪口をいう

カラケツ	裸のお尻
カラツケツ	体になにも負って いない状態
カラミ	軽い
カルッコイ	交代
カワリバンコ	やせ衰える
カンキヨレ	頭を左右に振る
カンブカンブ	じゃがいも
カンブラ	かき回す
カンマガス	
カンマス	
キ	
キカンボ	いたずらっこ
キジリ	イロリ(囲炉裏) の末端
キッキ・ギツキ	魚(ドジョウ)
キツタネイ	汚い
キツチャ	切れた

ギツチョ	左利き
キツシテロ	動くな
キドコロネ	着たままごろ寝
キビガイイ	見事だ、立派だ
キビシヨ	急須 <small>きゅうず</small>
キビシヨ・キビス	足のくるぶし
キメツコ	すねる、反抗する
キメツコ虫	黄色い
キュウロイ	おいでなさい
キラシ	きなさい
キラツシエイ	霧 <small>きり</small>
キリシ	まな板
キリバン	切れない
キンニエ	昨日
キンニヨ	
ク	
クイヌゲ	大食い

クイヨ・クナンシ	ください
ヨ・クリヨ・クン	
チエー・クンロ	
クサモチ	売春婦
クスグツテ	くすぐったい
グズマク	ぐずぐずいう
グズラムズラ	ぶつぶついう
クソヘビ	まむし
クタバル	死ぬ
クタビツチャ	つかれた
グダマク	大声でグチャ悪口 をいう
クチクナル	満腹になる
クチビロ	くちびる
クチペロ	
クツチャクネエ	与えたくない
クツツオ	くるぞ
クツツブル	
クツツムル	目を閉じる

ケド	かまど
クネ	イグネ (屋敷林)
クベル	焚く
クボ	くも
クラスケル	殴る
グルニナル	組になる
グルリモツケエ	あたり一面
クレツペエ	あげましよう
ケイコ	蚕
ケイトギ	ケイトウ (植)
ゲエイダ	多い
ゲエイル・ケール	帰る
ケエツタ	帰った
ケエモノ	買い物
ゲス	最後
ゲスツボ	
ケチクソ	けち

ケ

ケツガレ	居なさい
ケツベタ・ケツ	尻
ケムタガル	遠慮される
ケムダシ	煙突
ケンピキ	肩こり
コイツラ	この人たち
コウノケ	眉
コキタネ	汚い
コギル	値切る
コゴリ	かたまり
コザキ	くず米
コジミダマ	たくさん
ゴス	ございます
コスイ	ずるい
ゴセヤク	腹が立つ
コダドコ	こんな所
コツチャア	こちら

コ

コツチャア	こりた
ゴツツオサマ	ご馳走様
コナス	悪口をいう
コネイダ	この間
コノマシガル	うらやむ
コブシ	ゲンコツ
コマッコイ	細かい
コミツチリ	いっぱい、たくさん
コユミ	暦
コレツパツカシ	少しばかり
コワイ	つかれた
コンコンサマ	キツネ
コンダ	この次
コンニヤ	今夜
ゴンボウ	ゴボウ
サアレカマネエ	なにもかまわない

サ

スク	敷く
スクダマル	沈黙する
スズム	沈む
スツケイ	酸っぱい
ズッコケ	ずり落ち
スツテツペン	頂上
スツポ・ツツポ	筒袖
ズナイ	大きい
ズニノツテ	調子にのって
ズンノツテ	脛 <small>むね</small>
スネツバギ	隅
スマッコ	

セ

セイル	いれる
ゼエゴ	田舎
セツチン	大便所
セデクル	つれてくる
セドヤマ	裏山、イグネ

セナ	兄
セマツチエ	
セベエ	狭い
セワシ	忙しい
ゼンゼ・ゼネ	お金
センニ	前に

ソ

ソウガン	そうですか
ソウダ	そうです
ソウダケンジモ	
ソウダゲンチモ	そうだけれども
ソウダナイ	そうですね
ソウダベエ	そうでしょう
ソウデナカンベカ	そうでないでしょ
ソウデネー	うか
ソグッタ	そうでない
ソグネル	失敗した

ソソベエ	ざらざらする
ソダニ	そんなに
ソダモノ	そんなもの
ゾックリ	そろえて
ソネ	山の頂上
ソバイコー	近くにこい
ソバイッコ	れごと
ソベエル	甘い、たわむれる
ゾロツベ	粗末
ソンジモ	それでも
ソんジャカラ	それだから
ソんツラコト	そんなこと

タ

タカアシ	竹馬
タガク・タンガク	持ちあげる
ダカサル	抱かれる
タシコ	たすき

ダス	与える
ダダッコロブ	勢いよく転ぶ
ダツベ	だろう
タデメイ	上棟式
タバツツラ	束
タマガ	儉約
タマゲル	おどろく
タマス	(子いごもを) なためる
タマニ	時々
ダラ	人糞尿
タンガラ	背負いかご
タンコブ	コブ
ダンジャ	だれだ
タント・タンマリ	たくさん
タンニエ	足りない
ダンボ	旦那

チ

チカダ	血の道の病
チソ	紫蘇(植)
チダラマツカン	血に染まって真っ赤
チヂンカケ	馬の交尾
チツト	少し
チツトバシ	少しばかり
チビラチビラ	少しずつ
チメタイ	冷たい
チャツチャア	お父さん
チャンチャ	おしまい
チヨウマ	蝶々
チヨツケカケル	けしかける
チヨツコラ	ちよつと
チヨロカラスル	落ち着かない
チンコイ	小さい

ツ

ツギ	布切れ
ツツカリボウ	心張り棒
ツツケエセ	返せ
ツバ	唾液
ツブ	タニシ
ツマシ	つつましい
ツヨ	つゆ
ツラ	顔
ツンダス	差し出す
ツンヌゲル	ぬける
ツンノメル	前に転ぶ
ツンブググル	水にもぐる、もぐりこむ
ツンブツクグリ	

テ

テエイコ	太鼓
デエク	大工
デエゴ・デエゴン	大根(植)

ナジヨッタカ	どんな
ナジヨニシツペエ	どうしたらいいだろう
ナソイニ	斜めに
ナヅキ	額
ナツチマツタ	なってしまった
ナツバ	菜
ナナゴナ	めちやくちや
ナニバシモネエ	少ししかない
ナマラハンジャク	未熟
ナワモジリ	縄ない
ナンダイ・ナンダライ・ナンダン	なんですか
ナンツウゴツタベ	なんとしたことだ
ナンツツタツテ	なんといつても
ナンデ	なぜ
ナンデカンデ	必ず、どうしても
ナンデモカンデモ	是非にも

ナンボ	いくら
ナンボデモ	いくらでも
ニ	
ニガツポイ	苦い味がする
ニゲエイ	二階
ニシヤ	お前
ニヤンコ	猫
ニンニヤカ	
ニンニヤガ	賑やか
又	
又カス・又ガス	いう
又クイ・又グイ	暖かい
又ゲル	逃げる
又サル	のる
又スクライ	盗み食い
又ツチル	ぬれている
又ルマツコイ	ぬるい

ネ	
ネエゾイ	ないですよ
ネエベカ	ないでしょう
ネジコム	抗議する
ネゾイ	くどい
ネツカラ	思いのほか
ネツカラダメ	もとより全然ダメ
ネツクツチ	さっぱりしない、はつきりしない
ネットコ	寝る所
ネツパス	はりつける
ネバツチ	粘る
ネンジン	ニンジン(植)
ノ	
ノゲタ	逃げた
ノコヅリ	のこぎり
ノツケル	乗せる、載せる
ノツコス	越える

ノツペニ	きりなし、常に、 みだりに	ハソンスル	つくろう	ヒジャカブ	ひざ頭
ノツペラボウ	平面的に	ハタツ	はじめる	ヒジャツカブ	
ノツポ	背が高い	ハツコナス	悪口をいう	ビジャツコ	ぬかるみ
ノボル	足を踏みつける	バッチ	末っ子	ヒタリコギ	左利き
ノマル・ノメル	埋まる	ハットバセ	打て	ヒッキラス	引き続き
ノメシコキ	無精者、だらしな い	ハナグラ	イビキ	ヒツコゲル	挫ける <small>こ</small>
ノンノンサマ	神仏様	ハナド	鼻	ビツチク	背が低い
ハ		ハネツクラ	かけっこ、走る	ヒツツアゲダ	きりさけた
ハカイグ	はかどる	ハネル	満腹	ヒツバグ	剥ぎとる
ハガイグ		ハラクチイ	わずか	ヒツパタク	殴る
ハクシヨン	くしゃみ	ハンカ	毎回、いつも	ヒナクサイ	焦げ臭い
ハグル	試験などに失敗す る	バンキリ	今夜	ヒボ	ひも
ハゲツチヨ	はげ	バンゲ	順番	ヒポイ	炎
バサマ・バツバ	おばあさん	バンチヨウ	小僧、店の人	ヒヤアル	はいる
ハジッコ	端	バントウ		ヒヤク	ひしゃく
		ヒ		ヒヤシブリ	久しぶり
		ヒキジリ	だらしない	ヒヤッコイ	冷たい
		ヒシテ	一日中	ヒヤラ	など
				ヒヨットシット	ひよっとすると

フ

フウタ・フウタブ	類
フグス	解く
フズニ	こんな風に
フタダ	豊富だ
フッキリ	打ち切り
ブククラスケル	たたく
ブッコロス	打ち殺す
ブツシヤセ	不幸せ
フツタケル	たきつける
ブツタス	突き刺す
ブツトパス	打つ
ブツバダダ	たたく
フルシキ	風呂敷
ブンズイロ	紫色
ブンナゲル	投げる、捨てる
ブンノボル	踏みつける
ブンマダ	散布する

へ

ベイ	くだろう
ベイベイ	着物
ベゴ	牛
へズル	減らす
ベツタリ	たくさん
へデエナシ	無意味
ペロ	舌
ペロペロシテナ	のうのうとしてい ないで
ベンチャラ	多弁

ホ

ホイジヨ	包丁
ホイチヨウ	
ホイド	乞食
ホウタブ	頬
ホギル	芽を出す
ホックイ	杭 <small>くい</small>

ポッコス

壊す

ポツチャ

お風呂

ポットスット

ちよつとすると

ホトケサマ

瞳

ホネオレル

つかれる

ホマチ

小遣い銭

ホリッコ

堀

ポレ

老化

ホレミロ

それみなさい

ホロク

落とす

ホロスケ

ふくろう、気がき
かない

ホンシコ

本気、真剣

ホンニ

本当に

ポンポ

腹

マ

マケ

血族

マジボイ

まばゆい

マツカン	真紅	ミダクナシ	醜 <small>みにく</small> い人	メツケダ	みつけた
マツコブチ	イロリの縁	ミツサンシヨ	御覧なさい	メツコ	片目
マツチイロ	待っていなさい	ミツセエ	みなさい	メド・メドッコ	穴
マツト	もつと	ミツチャアビ	水浴び	メナシ	あかざれ
マデイニ・マデニ	丁寧	ミツチラ	大いに	メメツ・メンメズ	みみず
マナク	目	ミナンシヨ	みて	メロ	女の子
マネッコ	真似事	ミバ	体裁、外觀	メンゴイ・メンゲ	可愛い
マメッコ	恥ずかしがり				
マメテイ	精が出る				
マヤウ・マヨウ	弁償する	ム		モジクル	もむ
マユゲ	眉	ムグス	もらす	モチグサ	よもぎ(植)
マルツト	全然	ムグロ	もぐら	モツキ	権(むくげ)(植)
マンデ	まるで、ほとんど	ムスイ	なかなか減らない	モツタモツタ	もたもた
マンニヤセル	間にあわせる	ムズイガル	可愛がる	モモツタ・モモネ	太もも
マンパチ	嘘一杯	ムソイガル	朝起きるとすぐに	モンズ	もず
マンマ	ご飯	ムナクサワリ	気分が悪い	モンモ	桃(植)
川					
ミグセエ	見苦しい	メ		ヤ	
		メエ	眉	ヤガマシイ	うるさい

第二節 「ことば」の文化

ヤギル	燃やす	ヤンナ	するな	ヨッピーテ	夜明けまで、一晚中
ヤクビヨウ	伝染病	ヤンナンネイ	やらなければなら ない	ヨツポド	しばらく
ヤケオコス	腹を立てる			ヨバル	呼ぶ
ヤケツパタ	火傷 <small>やけど</small>	ユ		ヨワガシ	弱虫
ヤゲツパダ		ユグシ	串	ヨワツカシ	
ヤス	くまず	ユスイ	留守居	ヨワリ	ヨワリ
ヤズス	省略する	ユスグ	すすぐ	ヨンベ	夜業 <small>やぎょう</small>
ヤツカラ	くれるから	ユダレ	よだれ		夕べ
ヤツコイ	やわらかい	ユツチメエ	いってしまえ	ラ	
ヤツトコ	ようやく、かろう じて	ユツツバル	結いつける	ラクデエ	落第
ヤツトスツト		ユワシ	イワシ	ラチコクンデネエ	雑然としているの ではない、うそい うな
ヤツパシ	やはり	ユワツチャ	いわれた	ラツパフキ	ほら吹き
ヤツペエ	やりましょう	ユンベ	夕べ		
ヤンベエ		ヨ		リ	
ヤベ	歩け、進め、いこう	ヨウメシ	夕飯	リクジナシ	意気地なし
ヤヤ	赤ん坊	ヨギ	斧	リゴダ	利口だ
ヤラガシタ	やってしまった	ヨセッコ	脇、隅		
ヤロメラ	男の子たち	ヨツバラ	十分、たくさん		
ヤンダ	いやだ				

レ

レイサマ

雷

レエゲツ

来月

レエネン

来年

ワリ

悪い

ワレツキ

割れた木

ン

ンゴク

動く

ンジャ

それなら

ンダゲンチヨモ

そうだけれども

ンダゲントモ

そうだけれども

ンダッベ

そうでしょう

ンダナイ

そうですね

ンダラバ

そうならば

ンデネエ

そうでない

ロ

ロウリ

料理

ロクスツポ

少しも

ロクデネエ

意地悪い

ロスケ

ロシア人

ロツペイ

六杯

ワ

ワアゲエ・ワゲ

我が家

ワスラ

おもちゃ

ワスラ

悪さ、いたずら

ワラアツシャンナ

笑わないでください

ワラシ

子ども